

須坂市須坂伝統的建造物群保存地区シンポジウム
～わたしたちの町並みを未来へ引き継ぐために～
報告書



日時：令和6年（2024）7月28日（日）
会場：生涯学習センター3階ホール



須坂市須坂伝統的建造物群保存地区シンポジウム

わたしたちの町並みを 未来へ引き継ぐために

須坂市では、地域住民の皆様のご理解・ご協力のもと、30年以上にわたって町並みの保存に取り組んでまいりました。令和6年(2024)5月17日に国の文化審議会から文部科学大臣へ、「重要伝統的建造物群保存地区」選定の答申があり、今後の官報告示を経て正式に選定となりますが、これを記念してシンポジウムを開催いたします。



開催日時

令和6年(2024)

7月28日(日) 13:00~16:30

参加費
無料
申込不要



会場

須坂市

生涯学習センター

3階ホール 須坂市大字須坂747番地イ (常盤町)

駐車場案内
関連情報は
こちら



タイムスケジュール

12:30 開場・受付

13:00 開会

13:20 基調講演

14:10 基調講演

15:15 パネルディスカッション

16:30 閉会

基調講演

『保存地区のこれまでとこれから』

講師：西村 幸夫 氏

(國學院大學観光まちづくり学部 学部長・教授)

『保存地区の特長と価値』

講師：土本 俊和 氏

(信州大学工学部 教授・須坂市伝建保存審議会 会長)

パネルディスカッション

『重伝建選定への取り組みと
これからのまちづくりについて』

〈主催〉須坂市

〈お問合せ〉須坂市社会共創部文化スポーツ課重伝建推進係

TEL: 026-248-9027 E-mail: bunkasports@city.suzaka.nagano.jp

須坂市須坂伝統的建造物群保存地区シンポジウム

わたしたちの町並みを未来へ引き継ぐために

基調講演 『保存地区のこれまでとこれから』

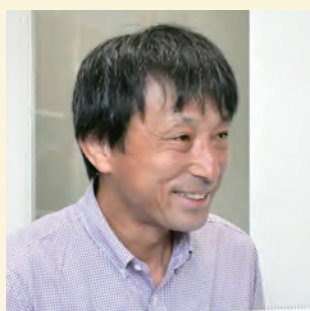


講師：西村 幸夫 氏

(國學院大學観光まちづくり学部 学部長・教授)

1952年福岡県生まれ。東京大学工学部都市工学科卒、同大学院修了。明治大学助手、東京大学助教授を経て、1996年より東京大学教授。その後、東京大学副学長、東京大学先端科学技術研究センター所長、東京大学大学院教授、神戸芸術工科大学大学院教授を経て、2020年より現職。海外では、アジア工科大学助教授（バンコク）、MIT客員研究員、コロンビア大学客員研究員、フランス国立社会科学高等研究院客員教授などを歴任。工学博士。

基調講演 『保存地区の特長と価値』



講師：土本 俊和 氏

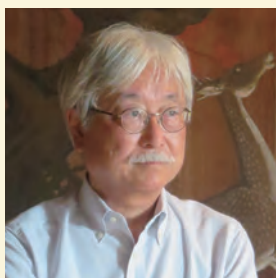
(信州大学工学部 教授・須坂市伝建保存審議会 会長)

1961年東京都生まれ。東京大学工学部建築学科卒、同大学院修了。株式会社国建建築設計部首里城復元グループ勤務、土本建築都市研究室を開設。その後、東京工芸大学助手、信州大学助手、助教授を経て、2001年より信州大学工学部教授。海外では、レスター大学都市史研究センター研究員（イギリス）などを歴任。博士（工学）。

パネルディスカッション 『重伝建選定への取り組みとこれからのまちづくりについて』

重伝建選定へのこれまでの取り組みや、保存対策調査を通して把握した須坂の町並みの特長や価値、さらには重伝建選定後のこれからのまちづくりに関して学識経験者や地域住民、行政のそれぞれ立場でパネルディスカッションを行います。重伝建選定をスタートラインと捉え、これからの須坂について一緒に考えましょう。

コーディネーター



渡邊 泰 氏

元塩尻市文化財課 担当課長
須坂市伝建保存審議会 委員

パネリスト



梅干野 成央 氏

信州大学工学部 准教授
須坂市伝建保存審議会 委員



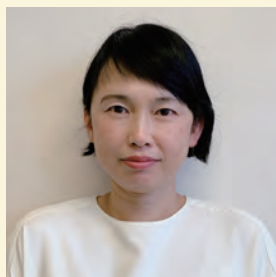
小林 義則 氏

須坂景観づくりの会 理事長
須坂市伝建保存審議会 副会長



山上 万里奈 氏

ゲストハウス蔵 代表



梅津 章子 氏

文化庁文化財第二課
主任文化財調査官



三木 正夫

須坂市長



保存地区の町並み



店舗の横に設けられた脇門



ぼたもち石積み

目 次

主催者あいさつ.....	1
ご来賓あいさつ.....	2
基調講演「保存地区のこれまでとこれから」.....	4
—重要伝統的建造物群保存地区選定の答申を受けて—	
講師：西村 幸夫 氏(國學院大學観光まちづくり学部 学部長・教授)	
基調講演「保存地区の特長と価値」.....	13
講師：土本 俊和 氏(信州大学工学部教授・伝建保存審議会会長)	
パネルディスカッション	
「重伝建選定への取り組みとこれからのまちづくりについて」.....	23
コーディネーター：渡邊 泰 氏	
(元塩尻市文化財課担当課長・須坂市伝建審議会委員)	
パネリスト：梅干野 成央 氏(信州大学工学部准教授・須坂市伝建保存審議会委員)	
小林 義則 氏(須坂景観づくりの会理事長・須坂市伝建審議会副会長)	
山上 万里奈 氏(ゲストハウス蔵代表)	
梅津 章子 氏(文化庁文化財第二課主任文化財調査官)	
三木 正夫 (須坂市長)	
謝辞.....	38



【主催者あいさつ】

〔須坂市長 三木 正夫〕

本日は暑い中、大勢の皆様にご参加いただきましてありがとうございます。

5月17日に開催されました文化審議会の文化財分科会におきまして、重要伝統的建造物群保存地区選定の答申がされました。また、本日遠路ご出席いただきました佐渡市も選定の答申がされ、昨日世界遺産に登録が決定されました。誠にありがとうございます。

私は今後重伝建地区として全国の地区が連携していくことが大切ではないかと思っております。これからの地域振興というのは、1つの地域だけでなく、様々な地域と連携していくことが大事だと思いますので、重伝建地区として全国の他の地域との連携も行っていきたいと思っております。

重伝建の選定につきましては建物の所有者の皆様、地域の皆様、信州大学の先生方、学生の皆さん、審議会の皆様、そして町並みの保存に長い間努力されてこられました各団体の皆様、大勢の皆様にご協力をいただきました。文化庁、長野県の行政機関の皆様にも様々なご指導をいただきました。皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

須坂地区につきましては1989年に調査を始めました。しかし、当時は都市計画と伝建の選定の両立が難しい時代でございました。その間須坂市としては保存事業を行ってまいりました。

しかしながら、近年職員が調査したところ約半数の建造物が解体されているということがわかりました。そして「重伝建の選定に向けた事務を行った方がいいのではないか」という職員からの提言を受けまして、重伝建の選定への手続きを進めることにいたしました。私はこのよ

うな形で、市の職員が自分たちでまちづくりに挑戦をして今実ったということが大切だと思います。そして、市民の皆様と共創、共に創るという形で今回の選定答申がなされたということに感謝をしております。

今回のシンポジウムは選定の答申を記念するとともに、これから新たにこの地域をどのようにしていくかということが大切だと思っています。市民の方から「次の子供たちや孫の時代にこの地域を残すこと、このような建造物を残すことが大事」という話をお聞きしました。今後は、この重伝建地区の答申に基づきまして、また新たなまちづくりを共創の気持ちでやっていくことが大切だと思っております。

本日は國學院大学の西村先生と信州大学の土本先生に講演をいただきます。2人には昭和の伝建調査から今日に至るまで長きに渡り須坂市の町並み保存に関わっていただきました。今までも様々なご指導をいただくとともに、本日は本当に暑い中、ご多忙の中ご講演を賜り感謝を申し上げる次第でございます。ありがとうございます。

そして、コーディネーターの渡邊様を初めとして素晴らしいメンバーでパネルディスカッションを行うことができます。貴重なパネルディスカッションとなると思いますので、ご期待いただきたいと思います。

重ねてこの暑い中、お忙しい中お集まりいただきました皆様方、ご講演いただく2人の先生、パネルディスカッションに参加していただくみなさまに心から感謝を申し上げまして、開会にあたりましてのお礼の言葉とさせていただきます。本日はありがとうございます。よろしく願いいたします。

【ご来賓あいさつ】

〔文化庁文化財第二課主任文化財調査官
梅津 章子 様〕

ただいまご紹介に預かりました文化庁の伝統的建造物群部門の主任調査官をしております、梅津と申します。一言文化庁を代表いたしましてごあいさつをさせていただきます。

本日は須坂市須坂伝統的建造物群保存地区シンポジウム～私たちの町並みを未来へ引き継ぐために～にご招待いただきありがとうございます。須坂市須坂は令和6年5月17日に開催されました文化財分科会において重要伝統的建造物群保存地区として適当であるという答申を受けました。近々予定されている官報告示という国の告示をもってして、正式に重要伝統的建造物群保存地区つまり重伝建に選定されることとなります。須坂市の行政の方々、須坂市をサポートしていただきました長野県の方々、そしてなによりも長年にわたって須坂を愛し、その継承に取り組んできた方々の長年の努力が形になったものという風に思っております。おめでとうございます。

また本日ご臨席いただいておりますが、西村先生、土本先生そして梅干野先生など学識経験者の先生方の長年にわたるサポートは須坂の質の高い町並み保存には欠くことのできないものと考えております。文化行政をつかさどる文化庁を代表して感謝申し上げます。ありがとうございます。

さて、須坂は近世を通じて街道が交差する辻を中心に、物資の集積地として発展した町場を基盤として、近代になり製糸業の隆盛とともに栄えた商家町です。江戸時代末期から昭和初期にかけて建築された装飾的な意匠をもつ大壁造りの商家や密度高く建ち並ぶ長屋、そして特徴的な土蔵や社寺など多様な建築物に加えて、主

屋の脇に立つ立派な脇門や、ぼたもち石積みといった特徴的な基礎そして特色ある伝統的建造物が一体となって歴史的風致を形成しているということで、北信地方における製糸業の隆盛をよく伝えて価値が高いとして評価しております。

選定にあたりまして、先生方に町を歩いていただきました。そのとき緩やかな傾斜を持つ地形を生かして、古くから水路が通されていたこと、そしてこの水路は、近世には生活用水や農業用水として生かされ、近代になって製糸業が盛んになり水路を利用した水車等水力を活用することで須坂の製糸業の近代化の発展に寄与したことも評価するべきというご意見をいただきました。現在でも自然豊かな水路を活かして町が維持されているというのは、江戸時代から、もしかしたらもっと前から続いている、そのような特徴を活かして須坂の町が発展してきたことが分かります。

今朝方1時間ほど町を歩いてみました。やはり通路から緩やかに傾斜して扇状地に広がる町場というものも非常に特色があり、水が自然に流れていってそれが活かされていたということを感じました。車で町を通過してしまいますけれども、一度車を置いて歩いていただくと須坂の町の発展の基盤を見ることができるんじゃないかと思います。今日は暑いですが、涼しくなったら車を置いて歩いてみていただけたらと思います。

また建築物につきましても、屋根の形式や、意匠的でバラエティに富んだ一つ一つ質の高い多様な建築をもつということも先生方に高く評価していただきました。

このたび選定の運びとなりますが、一方でなぜ今まで選定されなかったんだろうという声も多く聞かれました。須坂は重伝建地区としてふさわしい価値を有するということは長い間昭和のときから言われてきたと存じ上げておりま

す。選定までに時間を要したのは様々な理由があるというふうに伺っておりますが、その間須坂は立ち止まることなく、様々な活動が続けてきたことを承知しております。

その一つの事例として、須坂の歴史や文化を県内外の様々な大学などの研究テーマとして提供することによって、蔵の町並みキャンパス事業など、若い人たちの交流人口を増やすような取り組みを長年続けてきたということを伺っております。

今朝町の中を歩いてみますとチャレンジショップとして場所を提供し、さらに場所だけじゃなくて創業支援もきめ細やかに役所と民間の人たちで行っているということを伺いました。歩いてくると、店舗も少しずつ増え、新しい業種が入ってきて、古い伝統的な味噌屋さんなどのお店もある一方で新しい店舗が増えてきて、全国の重伝建地区がうらやましいと思うような取り組みをされているんだと改めて実感いたしました。

須坂市と新潟県佐渡市が官報告示されますと全国で106市町村、129地区が重伝建地区になります。多くの重伝建地区は、最初はどうしても保存に熱心になりがちで、次の段階としてどうやって町を継承し発展し活性化していくのかという大きな課題にぶつかっています。

しかし、須坂では各地で取り組みたいと思っている取り組みを既に先行しているということを改めて実感いたしました。この取り組みをやめることなく続けていただければ、おそらく10年後20年後、文化財としての保存だけではなく、須坂の町が活性化することを自信を持ってお伝えできればと思っております。

実際人口減少や高齢化、激甚化頻発化する自然災害の備えなど、歴史的な町並みを文化財として残すことは並大抵の努力ではないと理解しております。そこに対して須坂の人々は舵を切ったわけですので、国といたしましても全力で

支援していきたいと考えております。これからも引き続き行政と住民とが一丸となって保護を進めていくことを期待しております。

結びになりますが、本日お集まりの皆様の益々のご健勝と須坂市須坂の一層の発展をお祈りいたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

〔全国伝統的建造物群保存地区協議会
関東甲信越静岡ブロック代表
塩尻市教育委員会文化財課長
古畑 比出夫 様〕

ただいまご紹介いただきました塩尻市文化財課長の古畑と申します。どうぞよろしくお願いいたします。塩尻市は全国伝建協の関東甲信越静岡ブロックのブロック長を務めております。この度重伝建選定ということで大変おめでとうございいます。

実は長野県は重伝建地区が8つで全国のトップと並び、自治体数では7つということで一番大きい数になりました。これからの長野県は、重伝建のフロントランナーとして頑張っていく決意と覚悟をもって臨まなければいけないと、大変喜ばしいとともに責任の重さも感じるところでございます。

須坂市と塩尻市とは、どんなつながりがあるのかなと道中に色々考えておりました。須坂駅に立ち寄りしましたところ、待合室に産業を紹介するショーケースがあり、アルプスワインの須坂工場とアスザックフーズの紹介がされていました。アルプスワインは塩尻にも本社があり、長野県で一番大きなワイナリーでございいます。またアスザックフーズも塩尻市に工場がありまして、昨年塩尻市で開催したワイナリーフェスタに参加者への記念品としてフリーズドライの

商品を大量に提供していただきました。意外なところでつながっていると感じました。先ほど市長さんのお話にもありましたけれども、これからそれぞれの重伝建地区で連携をして、これからの産業の発展や地域の振興について頑張っていけないといけないと強く実感した次第でございます。

本日は、このような盛大な会にお招きいただき誠にありがとうございます。我々もオール信州として頑張っていきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

〔新潟県佐渡市
小木行政サービスセンター
地域支援係長 大久保 省三 様〕

ただいまご紹介にあずかりました佐渡市役所小木行政サービスセンターの大久保と申します。本日はシンポジウムの開催誠にありがとうございます。

須坂市さんと佐渡市は同時期に重伝建地区を目指し、ともに情報交換をしながら頑張ってきました。そして5月17日国の文化財分科会より重伝建選定の答申を須坂市さんと佐渡市が一緒にいただいたことを大変喜ばしく思っております。

須坂市さんとはこれからも重伝建の同期として、切磋琢磨しながら、重伝建地区の文化財的価値を高めながら、歴史的な町並みを後世に伝えていけたらいいなと思っております。甚だ簡単ではございますが私からのご挨拶とさせていただきます。

【基調講演】

「保存地区のこれまでとこれから」
—重要伝統的建造物群保存地区選定の
答申を受けて—

講師：國學院大學観光まちづくり学部
学部長・教授 西村 幸夫 氏

私と須坂との出会い: 1987年6月23日

国道406号線の拡幅問題
松坂での全国町並みゼミにおいて
信州須坂町並みの会から相談があった

最初に私が須坂にまいりましたのは1987年6月23日でした。なんでこの日に来たかという、その前の月に松坂で全国町並み保存連盟が主催する全国町並みゼミというのがありまして、そこに須坂の町並みの会の方が来て相談がありました。

須坂の町の中心部には国道406号線（一方通行）が通っているが、この道路の優先順位があがってない、せまいんですね。その優先順位をあげるためには、道路を広げるというような計画をすると幹線道路になるので優先順位があがるんじゃないかと考えている人がいるらしいという話がありまして。それをすると須坂の町の真ん中の通りがなくなってしまうので大変だというお話を町並みの会の方から相談がありました。どういうことをやればいいのかということ全国町並み保存連盟に言われたわけです。

私もその会員でその頃は明治大学の都市計画の助手でした。国道の道路の問題なのでこれは計画の問題だということがありまして、「若いうちで多少時間もあるだろうからあなたが行き

なさい。須坂に行ってどんな状況か見てこい。」というミッションをもらいまして、1987年に町並みの会を訪ねて行って、案内をしてもらいながら町を見ました。そこが出発点でした。



1889年における須坂の町並み(復原)(部分)
(出典:『須坂一伝統的建造物群保存対策調査報告書』2020)



(1987. 6)



(1987. 6)

今は道路が移っていますけども、もとはこれが例の406号線、幹線の道路ですね。当時はこんな様子でした。

当時既に406号線のバイパスができていたのでバイパスがあるのにわざわざこの道路を広げるのは普通ではないだろうということで、今この通りを大きく変えることは都市計画として

はないんじゃないかということを思いました。

当時の須坂の印象

坂のまち
規模の大きな塗屋の町家が多いこと
町家の意匠が多様であること
まちが迷路のようで方向がわかりにくいこと
石造物が多いこと

「市長への手紙」



そのときの印象は本当にこの町は坂が多くて迷路みたいで規模の大きな塗家の町屋が本当にたくさんあるなということでした。そして普通の町は大体似た建物が並ぶということが多くんですけども、普通の町と違って1個1個の建物の意匠が多様で、製糸家の方々の建物がお互い競い合っている。そういうふうな普通の町とちょっと違う雰囲気を持った町だなというのをすごく思いました。

それと坂でなおかつ扇状地に道路がつくられますので、道路と道路が必ず直交してないんですよ。中心部が五角形みたいにきていて、道

を3回同じ方に曲がってももとに戻らないみたいな。すごく迷路みたいでわかりにくくてよく道に迷うと。

加えて石像物の文化が非常に多いなという印象でした。

また、様々な町家の意匠が固有ですよ。外壁の塗りにムラがあったり、塀がまわっていたり、こういう形をしていたりですね、1個1個違うんですよ。そして横から中に入っていく道があってお庭がある。で奥に蔵があって、細長い敷地に蔵が非常にいっぱいあったりする。お庭には大変多様なしつらえがあって、豊かで。

つまり、ご覧になってわかるように非常に1個1個の規模が大きくて多様な意匠をしているということは本当に他のところにはないような意匠があるという印象でした。

当時1967年に現場をみて、道路の問題はすぐには大きな開発はなさそうだけでも、この町にはこれだけたくさんの建物があるんだけど、まだなんの調査もされていないということがございまして、これはそういう調査をやるべきではないかと。せめてこの町にはそういうのがたくさん残っているんだと、そういうことが言いたいということですね。

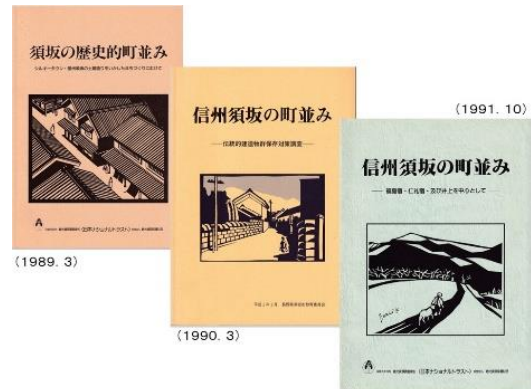
先ほど言いましたように、町並みの会で来ているわけなので行政と全然接触がなかったわけなんですけれども、当時市長への手紙というのを交換する目安箱みたいなものがありまして、それに「この町はすごく歴史的な建物がたくさん残っていて、他の町とは違う特色がある。しかしこれは全然調査されてないので、調査をすべきではないか。ついては日本ナショナルトラストという組織があって、ここではちゃんと補助金で調査費用をつけて調査をやってくれるというプログラムがあるので、そういうことに手を挙げてはどうか」というような提案をしました。全くの赤の他人で一介の助手が言ったくら

いで何が動くかと思ったんですけれども、その手紙に「ありがとうございます。検討したいと思います。」と返事がきました。それで実際に動きはじめるわけです。

日本ナショナルトラストで実際に調査が行われて、その後私は案内サインを作るようなことを須坂や福島や仁礼でやったり、1994年には松坂でやったゼミを今度は須坂でやるということにも関わりました。そのナショナルトラストの調査は89年～91年の3年間毎年報告書が出ています。

その後の須坂とのかかわり・その1

日本ナショナルトラストの調査
まちめぐりの案内サイン(須坂・福島・仁礼)
全国町並みゼミ須坂大会(1994)



当時千葉大学の先生が中心となって、実は私も調査に参加する予定だったんですけど、海外の大学へ長期で教えにいけないといけないということになってこの期間ほとんど日本にいなかったんですね。なので私自身は残念ながら調査に参加することができませんでした。市の方がナショナルトラストに申請をして、市が相応の調査費をつけていただいて全体でこういう調査をやるといことで、報告書はナショナルトラストの名前で出るということになります。全国

で毎年3か所くらいずつずっとやってこられた中に、須坂に関しては3年間も続いたということでありました。



(1991. 5)

その頃信州須坂町並みフェストという活動がずっと続いていて、その町並みフェストのある年の分を町並み手引きとして開催したということでした。



(1991. 7)

梅津調査官からお話がありましたぼたもち石積みの基礎のような他の地域には見られない非常に精巧な川の石を積むという技術があり各所に見られるということが非常に特色があると思いました。また、当時の祭りも見学しました。



(1993. 5)

今も須坂の町中にも少し残っているんですけど、こういう案内板をおくという事業を各所に、全部民地にお願いをして置かせてもらっているということで、その様子です。この町の案内板です。だいぶ色々なところに設置をしました。石なのでよく残るんですね。このときは大学院生中心にやりました。このとき調査に参加してくれた大学院生はその後国交省に入っています。なつかしい話です。

1994年に信州須坂町並みフェストと全国町並み保存連盟の町並みゼミ須坂大会がセットで行われたということです。30年前ですね。



(1992. 9)



(2023.11)

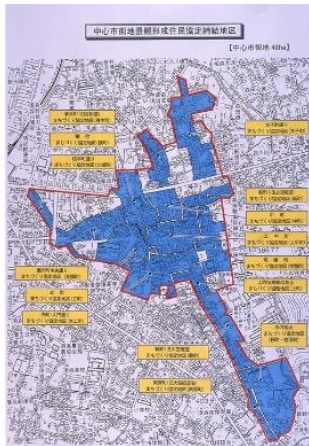
その後に町並みが変化していましたが、こういう風に長い期間をかけてなくなるものもありますけど、磨かれていくのもある。やっぱりそれはずっと本当に長い期間かけて大切にしてくられたということが感じられるわけですね。時代とともに変わっていているのがわかりますね。

だから今回重伝建選定の答申が出たというの

は、長い間にわたって町を大切にしようとした様々な活動の成果なんじゃないかなとすごく思うわけでございます。

その後の須坂とのかかわり・その2

歴まち計画(406号線問題)
都市計画道路の変更
小田切家住宅調査委員会

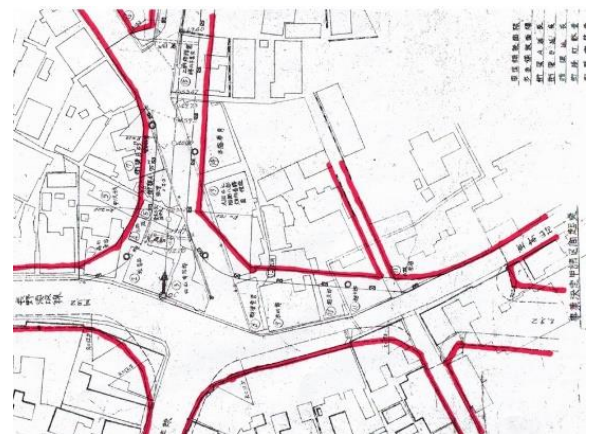


(須坂市資料)

406号線を改造するから1本東側に都市計画決定されてそちらに線を振るといふときに、新しい道路をつくるけど、古い通りは古い歴史的道筋として整備をするという国交省の歴史的地区環境整備街路事業という補助事業がありました。道路をつくるということになったら、クラシック美術館にちょうどぶつかるという本当に悩ましい問題がありました。

それ以前に須坂市は本当にいろんなことをやってくださっていて、これは街なみ環境整備事業の影響があるわけですが、地域ごと、町ごとに合意を形成して、中心市街地景観形成住民協定締結地区と書いてありますけれども、住民の方々が景観協定を結んで、行政もお金をいれて補助していこうという制度が国交省の制度で出来上がってきたんですね。

今まで国交省で個人の財産に何か補助を入れていくときは、大半は不良住宅の再生や被差別部落の住宅などでした。立派な建物にわざわざ国庫をいれて価値を高めるといふことは、文化財は文化財の理屈があるのでお金が入るけども、国交省はそうはいかないんです。だから、それまでなかなか一般の良質な住宅に国庫が入ってもっとよくするという理屈がなかなか立たなかったんです。最近は歴まち事業とかで色々進んでいますけれども、それは2000年以降の話なので、それまでは本当になかったんです。なかった中で、唯一それぞれの地域の住民の方々が自分たちのルールをつくって自分たちで守るということを受け入れてくれば、ある種そこに規制がかかるので、規制と補助金とが、両方でちょうどバランスするというところでそういうことだったら良質な住宅にも助成金をいれていいというときがありました。赤いところがまち環事業で、やるということで合意が形成されていたんですね。まち環事業をやるという合意をきちんと取り付けていた行政とそれから合意をちゃんと自分たちでルール化していった住民の方々の努力があって守られているところがあるんですね。





もともとの道はこういう道だったんですね。この細かい線が都市計画道路の決定された線なんです。これを直撃する形でクラシック美術館がある。駅から歩いてくると一番正面に、最初に見えるところですよ。この建物を残さないで歴まちでここの舗装をきれいにしあげると言われても、最初の重要な拠点を壊して、車道はきれいにするというのはバランスが悪いんじゃないかということでこの道路はまずいんじゃないかと言っていたんですよ。まっすぐな道がちょうどクラシック美術館につきあたっているのだからわかると思います。この線をまっすぐ通る予定だったんです。だからここまで整備が進んでいたんですね。市の方にとっては大変なことだったと思いますけれども、歴まち事業の場ですごく強く反対をしてこれは道路を曲げるべきではないか、クラシック美術館は残すべきじゃないかと強く主張しました。でもこれは全部決まっていた用地買収も進んでいたのをそれを変えるっていったら、今度はこちら側の用地も変わらなければいけないと。しんどくて

すごい大変だったと思います。

私は色々な委員会をたくさんやっていますけど、これは最後の最後までもめて、実は最後の最後の報告書が結論の部分が2つ書いてある。まっすぐする案と曲げる案と、議論をしてどっちをとるかみたいな感じ。最後の最後まで。多分両論併記で終わったのかもしれませんが。最終的に市は少し曲がるように決断してくれて、都市計画決定を変えてくれました。見てください、このすごく不思議な空間。これはももとの道の線がこうだったからなんです。買収したところもあるのでそこは道路にして、でもここは残すということで。ちょうど正面にクラシック美術館が見えるような形に曲げるってことで、これが都市計画の変更になってこの道になったんですね。

いまだにここを通るときに当時のことを思い出します。ここがやっぱり残されたことでクラシック美術館になったんですよ。こういうものを残してくれる行政が素晴らしいということで、コレクションをここにクラシック美術館として寄贈されたということですね。そういうすごい物語が残されていて、ここからはじまるということで伝建地区のエッジが非常に明確にできるわけですよ。

須坂の個性

- ・坂のまち: 扇状地の地形
- ・交点のまち: 交差点から縁辺部へ
- ・製糸のまち: 製糸業の立地と
製糸業をもとにしたまちづくり

この都市計画道路は浮世小路の前まで続いています。ここにあった家財、歴史や物語、小路もやっぱり大事だと。時代が変わってこういうものを大事にしていこうというのがあるんで

すね。こういう昔の記憶みたいなものを次につなげていくということがすごく大事なんですね。

私個人が考える須坂の個性としては、坂の町だと。扇状地形に道路が扇形に配置されているということから複雑な道路パターンが生まれてくるわけですね。だから迷路だというのは扇状地の傾斜にうまく道路をつくっているというようなことですね。

そして中町の辻を中心としてここから広がるというもともとの町の構造をもっていて、製糸業の立地と水路が動力源にもなるという仕組みを使われていく。そういう立地と製糸業をもとにしたまちづくり、それが今にも痕跡として色々なところに残っているし、そもそもエリアの建物そのものがそういう痕跡そのものではないかと思うんですね。まさにここから始まるということですね。



具体的に、かつてこの角が町の中心、へそだったわけですが、それが今は町のへそ、中心は多分できないですね。だからこれは近世から近代にかけての中心。そして現代の中心が南。そういう新と旧の中心っていうのがそれぞれのところにある。そういうオールドタウンとニュータウンがあるというのがこの町の特色だと思うんです。だからこの角を大事にしないといけな。でこれはやっぱり近世から近代の始めにかけての町の骨格を形成したところなんだと思います。



昨年の11月に越家住宅でコレクションの公開がありました。そこに私も行ってお話をしました。今までなかなか公開されていなかった、洋風の応接間です。

ここには製糸業の様々な道具類が非常によく残されている。公開された日にたくさんの市民の方が来られて、三木市長や当主の越宏一先生も来られました。越先生は美術の専門家で、東京芸術大学の名誉教授です。越先生がコレクションを今一度きちんと整理をしておしてそれを展示してこれを町に寄贈してくださって、製糸業の物語としてうまく活用することができるということになったわけですね。

蔵の中に当時の製糸業の様々なものが本当によく残っているんです。当時の女工さんの食べていたお茶碗とかお米を炊いたおかまとか、残っていますから、生活の色々なことを見ることができるということで。これをいかにうまく使ってこの製糸の町の物語をもう一回光をあてることができるかということに関して可能性が生まれていて、これに関しても今、土本先生が越先生とどういうふうに分けて研究していく

かということをやっているんです
ね。越先生のお宅にもお邪魔して色々相談を受けて、どういう形でうまく活かしていくかということに関してディスカッションをさせていただいております。こういうものをどういうふう
にうまく活用してこれから重伝建になったときに考えていったらいいのかということになると
思うんですけれども。

須坂の重要伝統的建造物群保存地区の
これから

- ・十文字のまちの構造が際立つように
- ・点在する大規模町家をつなぐ

これからはジャストアイデアなので。まず先
ほど言いましたように、中町の辻が元々の中心
なので、この十文字の街道の交差というのが本
当に大事。ここが中心だったわけですね。や
っぱりその構造が際立つようにすべきである
と思うんですね。それが過去を中心、ですから
現代と過去っていうのは両方中心があるとい
うことをわかるようにすればいいんですね。

もう1つは、点在している大規模な町家があ
りますのでそれをつないでいく。つなぐとい
うのは具体的に、例えば先ほどの越家のコレク
ションのように、製糸業のものをいろんな資料
から発掘し、町の物語としてつなげていくとい
うのもありますし、もしくはその間にある建物が
それなりの建物として調和が取れていくとい
うことで、結果的にもつなぐということがある。
それはソフトにもハードにもいえることなん
ですけど、こうした点在している大規模町家を
いろんな形でつないでいくと。そのつなぎ方の
創造性みたいなのが問われるわけですね。同じ
ものを並べていくってことはできないわけ
ですから。そういう大規模な町家が今建つとい

はまずありえないでしょうから。今の時代に
ふさわしいような使い方っていうのはなんなの
か。もしくはそこがなくなったとしても何らか
のイメージがわくようなつなぎ方っていうのが
できないかということがあると思います。



例えばこの十文字の街の構造ということ
でいうと、この角にはこういう石碑が立っ
ています。須坂町並みの起点って書いてあ
りますね。この辻は谷街道と仁礼道、山田
道が交わる場所だということですね。で
すから本当にまさにこの町のエッセンス
が実際に建っているわけですね。でもあ
まり気が付かないですね。でも本当に大
事なものが建っています。

実はその横に須坂町のころの道路元標
というのがあります。この道路元標は新
しく作りなおしたのになります。道路元
標そのものは花崗岩でできていて、だい
たいこれくらいのデザインですけどこれ
は新しいものです。でもここにあった
ってことは、やっぱり復元するのがいい
と思います。道路元標というのは大正
8年に道路法というのができて各市町
は道路元標を作り

なさいっていうのは政令の中で明示されるんです。つまりそれぞれの町の起点ですね。須坂町まで五里 10 キロという、どこまでかということまでなんです。だから東京まで何キロっていうと日本橋の中心までって意味ですからね。日本橋に道路元標がありましてね。このネットワークの本当の親元を示すんですね。須坂のものは日本橋の道路元標の町版なんです。でそれはどこに置かれたかということと大半は橋のたもととか、交差点とか、役場の前とかですね。そういう公道に面したところ、お城の前とか。ですから当時、長野県は多分大正 8 年か 9 年に県の告示がされているんですけど、この場所がやっぱり中心だったんですね。

我々もその隣にまちめぐりの案内板を作りました。それはこういう形の町並みの起点の碑があって、道路元標があって説明板があって、その向こうにはいろんな付帯する説明ができるような一番大きいサイズの説明板があったんですね。

須坂の重要伝統的建造物群保存地区の
これから

- ・十文字のまちの構造が際立つように
- ・十文字のまちと駅からひろがるまち

だからその十文字の町の交差が際立つようにする。それが歴史的なこの町のコアなんだとわかるように。でもそれだけではなくて、駅が現代のコアだとすると十文字の町が中町の辻を中心とした古い代の都市構造と、駅を中心にした放射状に広がる道があるわけですね。そこから始まる現代の道というのが両方で重なって途中でこの街が出来上がっているわけですね。そうするとオールドタウンとニュータウンがう

まく重なり合って、別のものとしてあるわけじゃなくて、そういう町なんですよ。そこを大事にしているということは、古いものだけでなく新しいものと古いものがお互いがお互いを際立つようにしていくということだと思ふんですよ。そうすると現代のまちづくりでもあると。

須坂の重要伝統的建造物群保存地区の
これから

- ・点在する大規模町家を物語でつなぐ
- ・点在する大規模町家を建物でつなぐ

それから先ほど言いましたように、点在する大規模町家を物語でつなぐと同時に、それを建物でつないでいたり、道でつないでいたりすると。ハードでつなぐか、ソフトでつなぐか、いずれにしても何らかの形でつないでいく。つなぐときに地元の方々のクリエイティブなアイデアがすごく大事になるんですね。古い建物は変にいじることはできません。でもその間のつなぎ方には創造性が発揮できるし、そしてそれが古い建物も引き立つような新しい建物のあり方はどんなものか、新しいビジネスのあり方はどんなものかっていうのを考えることにつながるんですね。単に新しいものが郊外のショッピングセンターみたいな形でできるんじゃなくて今の都市の中の構造に埋め込まれるように新しいものができてきて、魅力的な都市ができる。点と点の間を現代の線で結んでいて、それが点を光らせることになる。そういう結び方って何なのかということがすごく問われている。

須坂の重要伝統的建造物群保存地区の
これから

- ・製糸業での繁栄を感じさせるまちづくり
- ・須坂の生活文化を感じさせるまちづくり

そして、その物語として製糸業の繁栄というのがすごく大きな手がかりとしてありえるし、越家のコレクションをその代表例として須坂の生活文化を感じていく。かつての生活文化、現代の生活文化、これから作られていくかつてのものを大事にした未来的な魅力のある生活文化というのがあるんですね。作っていただけると思うんです。そういうことが重伝建になることの1歩になるんじゃないかと。つまりそれでこの町のフレーム機能となるんですね。もうここには高層ビルを建てるという時代じゃないわけだし、道路もどんどん通すような時代じゃなくなっているし、そんなお金もない時代に何ができるか。406号線をあんなに苦労した成果として、少し曲げて古いクラシック美術館のあの建物と新しい道路というのをうまく融合させたような知恵を、様々なところにこれから使っていただきたい。どうもご清聴ありがとうございました。

【基調講演】

「保存地区の特長と価値」

講師：信州大学工学部 教授

伝建保存審議会 会長

土本 俊和 氏

須坂市須坂伝統的建造物群保存地区シンポジウム
わたしたちの町並みを未来に引き継ぐために

須坂市生涯学習センター3階ホール
2024年7月28日（日）13:00-16:30

保存地区の特長と価値

信州大学工学部教授 土本俊和

ご紹介いただきました土本です。よろしくお願いいたします。題目が「保存地区の特長と価値」ということで、これまでの調査から明らかになった特長や価値など話すことを考えていたんですけども、それ以上にこれからどのような特長を引き出していくべきか、これからどのような価値を積み上げていくべきか、深めていくべきか、というところの出発点となるようなものの見方・考え方をお話ししたいと思います。

保存地区の特長と価値

保存地区

↓

保存地区とその周辺

保存地区というと線引きがされて、線の内側と外側という区別がありますが、保存地区と隣接している周辺の地域の広がりを含めて、大きく須坂全域を考えることが重要であると思います。また世界の文化財や文化遺産との関係性の中で考えることも重要というふうに思います。

保存地区の特長と価値

特長と価値

↓
自分の中にあるものを引き出していく
リラックスした状態で、あるいは、悩む
自分に負荷をかけてみる
手に余るものを手掛けてみる
自らの内にあり、自らを越えていくもの

特長と価値ということなんですけれども、調査から明らかになってきた特長や価値を一つ一つ箇条書きのように書くことももちろん重要なことだと思います。以前に行いました稲荷山の調査で報告書に特長というのを5項目くらいお題にする形で書きましたけれども、稲荷山の調査の後の反省としては、重伝建地区に選定されるに至ったとき、それまで調査する立場としては頑張ったと自分をほめるような気持ちになってしまって油断してしまうんですね。

重要なのは重伝建地区になる瞬間というか、なってから本当に頑張らないといけない。1個峠を越えたところで休んでしまっはいけないというのが反省でありまして、今日はこの矢印の下のような内容を考えていきたいと思います。

これは私の言葉ではなくて、月2回デッサン教室に通っていますが、この間行ったときに先生が1人1人の絵をコメントしてくれたときのものです。

やはり、須坂の特長はかくかくしかじかだと言って、それを守っていただけだと考えなくなる。ここでよくとがめられるのは、絵を描くうえでも、自己保護なんですよ。自分の絵を描いてしまって、それを繰り返し同じように書いていくと。これも町並みにしてみると、自己保護的なまちづくりをすると、もう一度人々が観光に来てくれるのか、飽きられてしまうのではないか、という考え方。自分の中にあるものを引き出していくということが重要だということ

ですね。だから挑戦的に絵を描いていく、線をひいていくということが重要であると同時に、リラックスした状態で書くということとか、あるいはやっぱり悩んでいくということが重要であるということ。描ける絵を描くんじゃなくて難しいテーマ、難しい画材に挑戦する、自分に負荷をかけてみるとか、自分にはできないような手に余るようなものを手掛けてみるということ。この上の4つが先生方からいただいた言葉のメモです。その下が昭和の頃に読んでいた本に書いてあるもので「自らの内にあって、しかし、それが自らを越えていくべきもの」ということで話していきたいと思います。

自らの内にあり、自らを越えていくもの

- ・1987年11月 須坂町並みの会発足
- ・1987年10月 I F H P国際学生コンペ（出口・土本）
 - 街区全体を見る目、漸進的な個別的更新原理
 - 街区の再生（信州大学建築学科3年後期、設計製図課題）
- ・1988年08月 須坂の建造物調査に参加
- ・1989年03月 『須坂の歴史的町並み』刊行
- ・1989年04月-1990年12月 沖縄県那覇市：首里城復原
- ・1989年01月 『信州須坂の町並み』刊行
丸山武彦絵、青木廣安文、須坂新聞社
- ・1991年-2000年 信州町並み景観賞

西村先生のお話と重なってしまいますけれども、これまでどのように乗り切ってきたかというところを踏まえると、要所要所で新しい革命を作り出してきたということだと思います。

下線が書いてあるものが私の関わった代表例でございます。

調べたところ、1987年11月に須坂町並みの会の発足が行われたということでした。

1987年10月のIFHP国際学生コンペというのは自慢しているわけではなくて、須坂と深く関わる内容ということですね。学生コンペと言って学生が参加する競技の設計で、日本都市計画学会の募集で国際審査を通過して優秀賞をいただいた内容です。卒業論文でやっていた京都のことを題材にして学芸員の先輩と一緒に、このときが博士課程の修士の2年生のときなんです。修士論文書かなきゃいけないんですけれ

ども、コンペでやっちゃったということです
ね。これは街区の全体を面的に細かいところも
全部見るというような視点、連続平面図って言
ったりもしますけれども、漸進的な個別的更新
原理ということで、ゆっくりとなおしていく。
場合によっては新しくするんだけど。街区の
再生という課題がありまして、現在信州大学建
築学科3年生の後期の設計製図の課題で取り上
げています。

これはまた後から話しますけれども、蔵の町
並みキャンパスがスタートして、そこで街区の
再生というのをやりました。この再生というの
は民家の再生と同じ再生なんですけれども、文
化財の修理で再生という少しやりすぎちゃ
う、違うものなので、今重伝建地区に選定され
たところからはしっかりとした地区の中での建
物の修理とかを文化財的な手法でやっていき
たいと思います。

1988年8月に須坂での建造物の調査があり
まして、大河直躬先生が調査団長でございま
した。特に大河先生が千葉大学の教授とともに京
都大学で稲垣先生が退職されて、その後の数か
月間大河先生が兼任するということがありまし
て、奈良女子大学の藤田盟児先生と調査をいた
しました。

「須坂の歴史的町並み」の刊行が1989年3
月にあったんですね。それを私は沖縄で受け取
りました。1989年4月から今年12月まで、沖
縄県那覇市にある首里城の復元に、国建という
設計事務所に入って図面を書いたり、写真分析
したりしていたんですね。このときに受け取っ
て非常に那覇にきて遠くにきたなというところ
があって、前の年に調査していた須坂を遠くに
感じて須坂と首里を同じ系統で考えるというも
のの考え方は全くなかったんですけれど。その
後、イコモスという勉強会がありますけれど
も、そういうところでやっているうちに地球規
模でものを考えられるようになったところがあ

ります。

重要なのは1991年から2000年まで「信州町
並み景観賞」というのを須坂町並みの会を拠点
にして審査していただいたところがあります。
これも後ほどお話しします。

- ・1993年04月 信州大学工学部に赴任
- ・1994年11月 世界文化遺産奈良コンフェレンス
→奈良ドキュメント採択
- ・1995年－2009年
街なみ環境整備事業補助金を導入した整備
- ・1996年頃 信州町並み景観賞の審査に参加
→景観に対する見方が大きく変わっていった
- ・2006年－2015年
社会資本整備総合交付金を導入した整備

信州大学に赴任したのが1993年4月なんで
すけれども、この年に町並みフェストがありま
して、重要なのはこの時期に日本では世界文化
遺産の今回の会議があって、「オーセンティシ
ティに関する奈良ドキュメント」というのが採
択されて、文化財というのは世界の宝であるけ
れども、その残し方は地域によって違うのでそ
の地域によって異なる残し方も尊重しましょう
というのが、重要なところでございます。それ
で法隆寺のような全解体修理も認められてきま
した。

この頃全くイコモスの会議とかには全然参加
しなくて、この時期に重要なことが行われてい
たということですね。その後今に至るまでに活
動してきて、修理修景事業、町並み環境整備事
業が10年間行われて、その後に1996年その延
長が行われてきたということなんですけど、文
化財の手法とは異なる手法ではありますけれど
も。15年間この事業には参加をしてなくて、
経産省の方に少し顔を出していたくらいなん
ですけど、須坂で半数くらいの建物がなくなっ
たとはいえ、この修理修景事業があったから残
ったというものが非常にたくさんあったわけ
ですね。

これより少し遅れて私は小諸の修理修景事業

を10年間担当して通いましたけれども、こないだの3月に重伝建地区への調査の報告書をまとめました。変化あって持続しているところですけども、特に須坂の営みの中で特徴というかは、この間別の委員会で丸山久子さんが言われていましたけど、須坂では「まちづくりをしましょう」といったときに、西村先生の都市計画の変更は大変な議論だったと思うんですけども、丸山さんは「須坂には大きな対立の構造をつくらない形でできた」と言われていた。だからすごく印象に残っています。先ほどの道路の道筋を変えるというのは非常に大きなものだったと思います。そこを乗り越えたというところで、人々の合意の基本的なところが形成されていったのではないかというふうに感じています。それが今日に至っているということになります。

- ・2006年度 蔵の町並みキャンパスが本格スタート
- 産・学・官・民の地域連携のまちづくり
 - 学1：大学、短大、高等専門学校
 - 学2：高校、中学校、小学校、保育園、幼稚園は含まれていなかった
 - 街区の再生を須坂で実施
(信州大学建築学科3年後期、設計製図課題)
 - 街区全体を見る
(裏、奥、長屋、付属屋、小屋、石積み、樹木)
 - 一足飛びではなく、
漸進的に個別的に更新していくまちづくり
 - 利活用の提案

我々の大学で「蔵の町並みキャンパス」が本格的にスタートするというのに貢献できたわけですけども、このことをやっていたのが今回の重伝建の選定に緊張感をもたせ、無関心にならずに済んだ大きな要因だと考えています。

最初は信州大学工学部としては長野市さんに「伝建やりませんか」って相談にいったんですね。その後学長が打ち合わせしていたんですけども、長野市の担当をやっていた方が須坂市にうつられて、須坂ではどうですかと声をかけてもらって連携をするということがあって「蔵の町並みキャンパス」がスタートいたしました。

ここで重要なのは、産・学・官・民の地域連携のまちづくりということです。学は大学です。これは信州大学ばかりじゃなくて、複数の大学で、短大も四年制大学も専門学校も入っています。スタートするときに、「高校とか中学とかを含めたらどうですか」ということを教育委員会の方に投げかけたわけですけども、当時の教育委員会としては、「町というのは、よくないことだから、そこに高校生とかは近づけない方がいい」ということで断られたんですよね。これが大きな賑わいとかを考える上で須坂のある意味の悪いところが出ていると思います。いいところは勉強地区で、高校も集まっているし中学もあってというところなんですけれども。学校を出たらすぐ家に帰っちゃう。すぐに家に帰らないとしても塾に行ったりとかして、駅前とかかなり塾が増えてミスタードーナツだったところも塾に変わったりしているんです。裏にホームラン亭やニュースコーとかが入っている建物が今度壊されることになっちゃったところがあります。正しいと思うんですけども、スケートボード禁止とか書いてあるわけですよね。歩行者天国にスロープがあって、そこでスケートボードをやられたら危ないだろうという常識的な判断だと思うけれども、若者がスケートボードをやることを禁止・排除しなければならないということかなあとと思います。

そういうことで須坂の特徴や利活用を考えるうえでは、高校・中学・小学校・保育園あるいは幼稚園というような年齢層を含めて考えていくということが重要だと思いますし、これは次の世代の人々にどのようにして受け継いでもらうかということにつながるのだと思います。

街区の再生を3年生の後期に須坂で実施しています。それは街区全体を見るということなので、あたりまえのことなんですけれども、街区の裏の奥のところにまなざしを向ける。それか

ら、立派な建物はもちろんしっかりと調べていくけれども、長屋、付属屋、土蔵、ぼたもち石積みなど小規模のものも大切にするというまなざしが必要なんですね。この街区の再生というのは一足飛びの都市計画ではなくて、漸進的にゆっくりと個別に修理したりして更新していくまちづくりというのをやっていくとともに利活用の提案も学生に考えてもらうことがあります。

・ 2008年09月 第16回イコモス総会
・ 国際シンポジウム（ケベック）

→西村先生からコメントをいただく

まだ間に合う

→須坂の人に伝える →西村先生の講演会

「蔵の町並みキャンパス」をやっていたんですけれども、1988年に調査した経験とかを踏まえていくと、重伝建の調査があつて間延びしてしまっているというところがありまして、学生にもなかなか伝えにくいところがあったりして、内面的に核心を得るとということが私自身難しいところがありました。

佐渡が世界文化遺産ということもそのユネスコの諮問機関イコモスというのがあるんですね。それが伊藤延男先生に声をかけてもらって、一緒に海外に行ったりしたんですけど。2008年9月に第16回イコモス総会・国際シンポジウムがありまして、この頃善光寺について研究していたので善光寺のポスターを取り扱ったんですね。カナダのケベックという町で行われました。先生方がたくさん参加されていたんですけれども、懇親会のときに西村先生からコメントをいただくことができました。私はまだ須坂をやっていますということを、先ほどの蔵の町並みキャンパスとかを中心に伝えました。本当に完璧な一言をいただきまして「まだ間に

合う」って言っていただいたんですね。これは本当に素晴らしくてですね。頑張らなければいけないということで、カナダから戻ってきて、須坂の方々に西村先生からのコメントを伝えました。

このケベックの2008年は佐渡の登録とちょっと関係しているというのもありまして、2008年我々信州大学は善光寺を世界遺産にする、重伝建地区にするということで報告書を書いてたんですね。ケベックにいたときに、時差ボケなので朝早く目が覚めちゃうので、洗濯物をまわしながらコインランドリーで善光寺の報告書を書いていたんですね。それで結局善光寺は残念ながら世界文化遺産の候補にはあげられなかったんですけども、今日の朝の新聞では2年後、2010年に佐渡は世界文化遺産の候補になり、それがスタートになったと書いています。それでこのときに善光寺をやっていたんですけども、それに比べて現在で十数年経って、須坂が重伝建地区になったというのは本当にありがたい採択を得ることができたなど考えています。

・ 2012年－現在 須坂市歴史的建造物登録制度
・ 2017年10月 『須坂市指定有形文化財
旧小田切家住宅修理工事報告書』
→「まちのへそ」：
「谷街道と大笹街道の交差点」
「中心地をほうふつさせる立派な建物」
→「まなざし」：
空き家ではなく、
留守宅であり、
眠家と呼ぶべき

それから須坂市さんは歴史的建造物登録制度というので登録文化財というのが国の文化財保護法の中に一部改正で付け加えられたものがありますけれども、市の独自の登録文化財制度で古い建物を登録して助成の対象にするものがあります。

もう1つは、須坂に重要文化財があるようになったということを聞いて、旧小田切家住宅を

どうするかということがあって、指示する前に検討委員会を行ったりして話し合ってきました。重要文化財を目指すということになって、2017年10月に修理が終わって報告書が出ましたけども、ここは重要文化財を目指すということを聞いていたので、なるべくあちこちいじらないで最小限に手を加えて、既にあるものそのものを評価するということになりました。

その結果、特に旧小田切家住宅の土蔵が、土蔵の中をきれいにしただけかのように見えるけれども、これが非常に素晴らしいですね、展示空間になっている、もちろん文化振興事業団のご尽力のおかげですけれども、須坂の修理の見本になるだろうということでもあります。

この旧小田切家住宅修理工事報告書というのは重要文化財を目指していたので、岡谷市の「やまいちか」と言われている重要文化財になったお宅を参考にしました。

西村先生に、「須坂にとってのまちのへそは谷街道と大笹街道の交差点である中町の辻であり、旧小田切家住宅は中心地を彷彿とさせる立派な建物であるのは疑いない」といった趣旨のコメントをいただいております。

私は旧小田切家住宅が保存されるにいたるとするのは人々のまなざしがこの建物に向けられていたからだと思います。先ほどの1988年8月の調査のときから色々な人がこれは大切であるというまなざしを向けていたという意味でこれは空き家と呼ぶべきではなくて留守宅であると。留守にしている時間がずっと長く続いているんだということだと思います。須坂は製糸業で栄えましたが、繭に例えて、繭の中にさなぎがあり、そのさなぎが蚕になって多くの場合その白い糸だけを取り出すことが製糸業の基本ですけれども、もう1つの蚕の役割というのは、繭から再び新しい子孫を残すことです。旧小田切家住宅への人々のまなざしというのは建物だけを取り出してということではなくて、その中

に眠っている諸々のことを含めて向けられている。留守宅であった状態というのはほかの須坂の空き家が色々ありますが、空き家と呼ぶべきではなく、空き家というのは非常に失礼な言い方である。留守宅というべきものであって、たまたま眠っていて再び目を覚めるのを待っており、これを眠家と呼ぶ。

・2017年度－2019年 重伝建調査：

信州大学工学部建築学科

・2020年度07月

『須坂—伝統的建造物群保存対策調査報告書—』刊行

ようやく重伝建の調査がはじまりまして、最近の重伝建調査は短期間でやるということで、3～4年くらいで報告書をまとめることができたわけでございます。私が今信州大学という立場でしゃべっていますけれども、調査を実際に行ったのは、梅干野研究室の学生さん、佐倉研究室の学生さん、松田研究室の学生さんで、僕はまとめ役のような立場をとりました。以前の稲荷山の場合は土本研究室だけでやったりしたんですけども、受け継ぎ伝えていってもらうためには、調査をしてもらうことが必要だったので、須坂の場合は先生と学生さんにやってもらう形で進めてきたところでございます。

・2020年— コロナ禍

・日常性は失われたのか／日常性は戻ってきたのか

→非日常の日常化：

イベントと祭りを連続させる現代都市

→見直された日常性：寝る所、居る所、働く所

ちょっと話が変わりますがけれども2020年くらいからコロナということになり、一般的にコ

ロナによって日常性が失われたという見られ方がされたわけであります。しかし、もう一方でコロナで日常性が戻ってきたというようなこともあるということで、僕はむしろ日常性がコロナで戻ってきたと考えていたところです。この日常性の反対を非日常性という、非日常なものを日常化してしまっているのが現代都市の一つのあり方で、年がら年中伝統をやって、年がら年中お祭り騒ぎをやっているというような、こういうものを連続させないといけないというような。非日常性を日常化させてしまっているのが現代なんですね。それがかなりやっていかなきゃいけないとかっていうのがあって、それで見直されたのは、ここで寝るのかということね、自分の居場所、居る所はどこか、そもそも働く所はどこかということで日常性が見直されているということになります。

・他者との関わり方はどうなったのか
→観光：光を観る、光として何を観るのか、

→何をどう観るかが歴史を変える
→環境を変えるのではなく、
環境に対する態度を変える

もう1つ、他人との関係性が変わってきたというところがあると思うんですけども。今観光が戻ってきていますが、観光のことを「光を観る」というふうに理解したりするわけですけども、光があてられたり光があるところに何を観るのかということ。そこで「何をどう観るのかが歴史を変える」ということで先ほどのまなざしよりもいかに見るかということですね。

越宏一先生のところに資料がたくさんありまして、製糸業のことを明らかにしていこうと細かい打ち合わせをさせていただきましたけれども、美術史ということで、ドイツのベルクリンという方が参考になるということを行っている

んです。それでベルクリンはそこでどういうふうに美術史ということを書いているんですかって聞いたら、それは見方が変わるということを行っていますね。美術の歴史というのは描き方が変わるんじゃなくて見方が変わるんですね。見方の変わり方の歴史。その結果として表現された背景があるということですね。

というわけで、「環境を変えるのではなく、環境に対する態度を変える」ということがあります。保存というのは、保存だから、利活用と言って、今までの普通の開発とか高速道路をつくるとか、道路を拡幅するとかということで、環境を変える。人間は環境を変える力はいくつも持っていて、自分の労働力とか機械を使って環境を変えることができるわけですね。環境を変えることができるというのが人間の特長なのかもしれませんね。だけど環境をいくら変えたって、不満は残るということ。またそれで環境を変えるということになっていってしまう。

もう1つは、環境じゃなくて、環境に対する態度・見方を変えるということ。そうなってくると、重伝建地区とその周辺に対して、色々な試みをして調査をしてきたということがありますがけれども、その大きなものを全体として環境ととらえたときに、私たちが今できるのは、そのものの見方を新しく変えていくということがあると思います。

・日常性を観る、日常性を観せる

→日常性に魅せられる
(芸術化された生活や暮らし)

「日常性を観る、日常性を観せる」というような観光が、製糸業の営みの中でできてきたわけですね。日常性を観ることにより、日常性に

魅せられるということがあって。そういった中で芸術化された生活や暮らしというのを書きましたけれども、非常に小さなところで、非常に美しい器があるとか、着物や話し言葉とか。普段の生活の中を観光資源に含めていくということもありかなと思います。そのときに、山丸組を中心とした製糸業を見ていくといいと思います。

- ・ 寝る場所、居る場所、働く場所への考察を深めていく必要がある
- ・ 子供の居場所、若い人々の居場所を考察する必要がある

寝る場所、居る場所、働く場所への考察を深めていくということが現代的に必要なと思います。そして子供を、先ほどの高校生は子供というべきじゃないにしても、若い人の場所、高校生、中学生、小学生、保育園・幼稚園、多くの人々の居場所を考えていくことが必要だなと思います。

柳田國男『三角は飛ぶ』

- 近代化で屋根が失われていった
- 屋根を守りたい

屋根のほか、現在失われつつあるもの
→まちの中の土、土の香り

そして近代化の過程で町並みのことを考えていくうえで初期の破壊というか景観の転用というのは、柳田國男「三角は飛ぶ」で書かれています。フランスの詩人のポール・クロードルが日本のことを詠んだ詩に何度も登場することが由来なんですけれども。三角というのは屋根の三角形のことですね。それがビルの大量の部屋

になることによって、三角形の部分がなくなったということを表現しています。近代化で屋根、そもそも建物自体を失ったということ。この屋根を守っていきたいというところがあったんだと思います。

- ・ まちの土壌は森林や農地の土壌と同様に長年にわたって培われてきたもの
- ・ 庭の土：旧小田切家住宅の庭、日常性とともにある庭
- ・ 土がよみがえる、建物がほほえむ
- ・ 人々の日常的な暮らしにはしめりけが必要
→ 滲むように日が暮れる
→ 滲むように庭と家が潤う

もう1つ、今高断熱高気密とか、道を作っているところもありますし、庭に芝をいれるのをやめて人工芝で庭を使ったりするということなので、屋根の形が現在失われつつあるのに加え、町の中の土、土の香りというものが失われつつあると思います。このまちに土壌があるということで、これは森林とか農地とか土壌とか、土自体に長年培ってきたものがある。この旧小田切家住宅の庭は土がよみがえってきたところであって、建物の方も喜ばしく思っているんじゃないかなって思います。ということで効率を重んじ、利潤の追求が求められる現代社会ですけれども、人々の日常的な暮らしには湿り気のあるものが必要となるということで、にじむように日が暮れ、にじむように家と庭が潤うまちづくりをしていければと思います。

LIVE AND LET LIVE

これは、“LIVE AND LET LIVE” ということで、1987年 IFHP 国際学生コンペでつけた英語

のタイトルなんですね。これは「生きよ生かせよ」という「共に生きよ」という意味です。



これは今山十として利活用されているところなんですけれども、1988年に僕が建物の調査をして屋根裏にもぐった記憶がある建物です。この建物は信州町並みの会の事務所で、この2階に畳の部屋が広くあって、そこで景観審議会の景観賞の審議を行っていて、毎年春に電車で須坂に来ていました。

このときにこういう古い建物の方に景観賞を与えるということが、人々の驚きになったんですよ。景観賞とは言っても現代建築、新しいものというのが生来だったんですね。この景観賞をやっていた時期は建物に対する見方が変わってきた。こういう古い建物が賞与に値するということで変わってきたということがあります。



これはコロナの前の写真なんですけれども、今とあんまり変わりませんが、「蔵の町並みキャンパス」の授業でこの2階を使わせていただきました。洋風の建築も町の中にあるということです。庭があるんですが、これは信州大学

が設計をやらせてもらって、できたものが残っています。三木市長からそのときに感謝状をいただいております、ありがとうございました。



これは重伝建になりますよといったときに報道があって、垂れ幕がありました。これもやっぱり駅前ですよ。これを学生さんと歩いた次の日の土曜日に行き行って撮った写真です。本当にここまで来てよかったなと思いますけれども、一番緊張感があったのは、都市計画審議会、去年の9月でした。



これは長屋で、1つの屋根で3軒入っているんですけれども、この長屋を住宅に修理したり

してやってきたけども、側面を見るとかなり傷んできています。



これは武家屋敷の長屋で、近世江戸時代にさかのぼるもので長い間ちゃんと使われてきたというのが残っています。これも見直していきたいと思います。一部が百々川のアートパークに移築されています。武家屋敷の下級士族の長屋です。



これは山十のところを入ったところですが、かなり傷んでいる街区の中にある建物ですけれども、こういうものを後世に継承できたらと思います。



これは右奥に向かって下っていてだんだん低くなっているけれども、建物は長屋長屋長屋長屋でつながっているんで。ここは将来手を入れていただけるのではないかと伺っているところでございます。



これは保存地区から外れたところで須坂病院の近くのところですが、重伝建の調査の最後の3月に市の方2名と保存地区とその周辺をまわって、全部の建物を見ました。これは驚くほど不思議な空間で、こんなところがあったんですかと。下に石が敷かれているんですよ。その隣は畑で土があるけれども、この開放的な空間が街区の中にあるのが不思議で。よく聞いてみるとここはもともと染物をやっていたところみたいでした。そういう発見があったりして。



つい最近のものなんですけれども、旧小田切家の写真です。ちょうど雨が降っていたからこんな感じなんですけれども。この日は芽が開いてて、報告書ではちょっと芽が出ているくらいだったんですけど、この土の香りがすごくよくて。



こういうふうにして、これから須坂でよいまちづくりをしていていただきたいと思います。よろしくお願いします。

【パネルディスカッション】 「重伝建選定への取り組みとこれからのまちづくりについて」

コーディネーター：渡邊 泰 氏
パネリスト：梅干野 成央 氏
パネリスト：小林 義則 氏
パネリスト：山上 万里奈 氏
パネリスト：梅津 章子 氏
パネリスト：三木 正夫

〔渡邊〕

早速ですが、ご登壇いただいた方々より「重伝建選定への取り組みとこれからのまちづくりについて」をテーマにパネルディスカッションを行いたいと思います。お時間ありませんので皆さんの紹介もここで改めてはしませんが、早速ディスカッションに入らせていただきます。

今日は3つのテーマでお話をしていただきたいなと思っております。まず第1のテーマですが、「須坂市の町並みが重伝建に選定されることについて」ということをテーマにしたいと思います。最初に梅干野先生、お願いしたいと思います。

伝建を選定いただく中で、伝建の保存対策調査によって明らかにされる価値が重要であります。信州大学の調査で今回改めて確認された須坂の建造物の特質とはなんなののでしょうか、さらに調査中に聞き取りなどで住民の方々と触れ合うことが多かったと思いますが、そこから感じられた住民の方々の思いはどんなだったのでしょうか。2点ほどお願いしたいと思います。

〔梅干野〕

信州大学の梅干野でございます。町の皆様におかれましては本当に今回の重伝建の選定、結果が出たということでおめでとうございます。

私も長い間調査に関わらせていただいた立場として、とても嬉しくその報告を聞かせていただきました。西村先生の先ほどのご講演の中でもありましたけれども、やはり町の中でこれだけ長い期間町並みの保護に向けて皆様が取り組まれてこられたと、その結果が今ここに結実化しているのかなと本当に強く思っているところでございます。改めまして本当におめでとうございませう。

今回の伝建の関係の調査に関わらせていただいて、本当に須坂の町並みにはたくさんの価値があるなと率直に感じております。

その全てをこの時間の中でお話することも難しいんですけども、端的に言えば、今皆様のお手元にこの三つ折りのチラシがございませうがこれを開いていただいて写真がたくさん載っている面をご覧くださいと思っております。

そもそも須坂の町並みに対する調査、昭和の終わりの頃に調査が行われて本当に充実した報告書が作成されています。今回我々の調査は3ヶ年にわたって行ったわけでございますが、既にまとめられている調査の内容をきちんと読み取り、踏まえながら調査をしてきたというような経緯がございませう。

今回新たに明らかになった内容は何かと言われると非常に難しくて、たいていのことはもう既に調査されているんですね。今回の調査では改めてきちんとその町の歴史と町並みを構成している建物たちを紐付けながら整理していく。この辺りを重点的にやってきたような経緯がございませう。

これを開いて見ていただくとたくさん写真が載っていますけれども、皆さんどうですか、須坂の町並みの特徴、何か一言で言えますか。なかなか難しいと思うんですね。それが須坂の町並みの特徴だと思っております。ここに写っている建物たち、本当に多様でなんだかつかみどころがない。でもその多様さが実は魅力的な

んじゃないか。その多様さ自体、この須坂の町が歩んできた歴史、その蓄積によって多様さが生まれている。このあたりを今回の調査でしっかりとその歴史と建物を紐付けながら解き明かしていったということでございませう。

具体的に言うと、近世以降この須坂の町は陣屋が置かれていわゆる陣屋町としての歴史を歩んできたというような経緯があります。ただ陣屋町といっても、いわゆる一般的なその城下町的な要素というのを、武家が町の中に点在していたり、町の中には商人だけではなくて農人も暮らしていたり、武家や商人や農人が、この十字の街道を基軸としながら、そこに点在して暮らしていた。これが、須坂の近世以前の町並みの特徴だろうと思っております。

さらにはそれぞれに対応した建物が建っていて、今残っている建物を見てみますと、特に間取りの面で見ると、非常に農家的なものや商売を営むための建物としての町家的なものと、さらには農家的なものと町家的なもののある種須坂型とも言えるような非常に個性的なものがあつたりいたします。そういった農家的なものと町家的なものが混じり合ったものを在郷町と言いますが、そういった近世的なベースをもとにしながら、近代以降には皆さんご存じのとおり、製糸業が発展してとてつもなく立派な建物が出来上がっていきますね。でもその中には実は農家的な間取りを持っているものとか、町家的な間取りを持っているものとか、須坂型のようなものとかが混じり合っている。今言ったような歴史があつて初めてこういう多様さというのが作られてきたんだということを明らかにしたのが今回の調査の特徴かなというふうに思っております。非常に一つ一つの建物の質が高くて、特に生活の空間であり、玄関がある部屋、そこから座敷に至る接客の動線、この質は極めて高いものだろうなと思っております。

調査をさせていただいて我々が感じたこと

は、所有者の皆さん、調査に入らせていただく
と建物の説明をこっそりしてくださるんです。
本当にこっそりしてくださって、私も圧倒され
ちゃうぐらい。ものすごく建物に対して愛着を
持っておられたなというのが素直な感想でござ
います。ですので、調査をしている段階から、
これは重伝建うまくいくだろうなという直感が
ございました。重伝建になっていく段階で重要
な過程が合意形成、皆さんで重伝建にしてい
こうという気持ちがないと難しいわけですが
でも、一つ一つの建物を持っている皆さんの建
物に対する愛着を聞いていると、これは間違い
ない、突破できるだろうなというのを調査の
段階で思ったというのが率直な感想でござい
ます。

〔渡邊〕

梅干野先生、端的にまとめていただいてあり
がとうございました。

それでは続きまして梅津調査官、この度の須
坂市須坂が重伝建選定の答申をいただけるまで
ご指導いただきました。本当にありがとうございました。
文化庁の調査官というお立場で、この伝建
地区須坂、どのように認識されて答申まで導
いていったいただけたのでしょうか？お願い
いたします。

〔梅津〕

今梅干野先生がこの地区の特徴を端的に言
っていただきましたが、実は国として選定する
ときに、基準っていうのがあって、伝統的建
造物がもちろん残っているんだけど、その中
でその建物が意匠的に優秀なものが基準（一）
。基準（二）が、地割がよく旧態を残してい
るもの。基準（三）がその周囲の環境が地
域的特色を顕著に示しているもの。2番目の
地割は武家町とかがイメージしやすいです
し、周囲の環境というところで白川郷みた
いなもの、茅葺の建物だけじゃなくて、あの
立地にあるから

こそのあの建物が残っているというものを
評価できる。ここは今先生が言ったことを一
番我々も感じておりまして、意匠的に非常
に優秀だという評価をしています。伝建地
区ってどうしても近世の町ですと制限があ
るので大体同じような町並みが続くん
ですね。ところがここは今言ってもらった
ように、瓦の葺き方1つにしろそれから
外観にしろ、ぼたもち石の石積みにし
ろ、配置にしろ、入り口にしろ、結
構違うんですね。結構違うんだけど、し
っかりとまとまっていてそこで技術の
高さを感じます。それからもう1つ、
歴史の積み重ねの中で、近世の陣屋
町として町並みができているけども、
製糸業で栄えたときに、かなり改修を
皆さんされているんですね。3階に
乗っけたりとか、増築したりとか新
築したりとか、そういうのも高い技
術があるからできるという意味で、
やはりどう切ってもここはもう意匠
的に優秀な建物がよく残っている。
これは審議会の先生方も満場一致で
ご理解いただいたところでござい
ます。

ただ担当官として少し答申まで導く上
でとても悩んだのが、建物が非常に質
が良いがゆえにこれから残すのも結
構大変だと思っています。規模も大
きいですし、技術も失われている
ところもあります。ただそこを本
当に須坂市は地域の人たちと残す
気があるというのを結構時間を
かけて意見交換させていただきました。
長野でたくさん町家が残っている
ところがあり、塩尻市も残って
おりますが、ちょっとやっぱり技
術もしかり、規模もしかり、
そういう点では心構えしっかり
しましょうねということで、
時間をかけて今日に至ったとい
うふうに考えております。

〔渡邊〕

伝建担当を務めた者として、選定基準（一）
をここで切られるというのはなかなか
ジェラシーを感じるような、
そうかやっぱりそれできた

かという感じでした。大変素晴らしいことですので、須坂の皆さん本当に喜ばしいことだと思います。おめでとうございます。

それでは小林さんお願いいたします。今まで地域の活性化に尽力されている中で、伝建の審議会委員をお務めいただき、保存活用計画などの制度設計に参画いただきました。そのお立場からこのたびの重伝建選定答申を受けての率直な感想をお聞かせください。

〔小林〕

須坂景観づくりの会の小林です。よろしくお願いします。今回の重伝建選定の答申がきたということでまずは住民の1人として大変嬉しいなと思っています。

西村先生、土本先生のお話の中にもありましたけども、昭和60年に町並みの保存運動が始まったということで、当時の町並み保存をしていたメンバーというのが、ちょうど私の親の世代の方々になります。当時は様々な問題があったて重伝建への動きをされることができなかったとお聞きしましたが、当時から40年経っているんですけども、この40年間町並み保存運動を継続していただいた先輩方には本当に感謝をしています。

そしてまた今回答申をいただいたということで須坂の重伝建制度がここから始まったんだということを我々も感じて、さらにこの素晴らしい町並みを次世代にどう繋げていくのか。それがこれからより良い方向に向かうように議論していかなければ、また活動をしていかなければと思っています。

先ほどのお話にもあったんですけども、この素晴らしい町並み、立派な建物があるんですけども、中には少し傷みの進んでいる建物も各地に見受けられますので、この重伝建制度を利用してそういう建物も修復されるのかなと思っています。

〔渡邊〕

やはり選定までに30年40年という時間をかけたいろんな思いを、ここでまた改めて前の方

向に進めていく大変良い場面をお聞かせいただきました。ありがとうございます。続きまして山上さんお願いいたします。テレビでもよく山上さんの活動を拝見しておりました。選定が確かなものになる前から、現在の活動をされていたその経緯と、選定によってこれから期待するということはどんなことなんでしょうか。お願いします。

〔山上〕

私は須坂出身のものでして、2012年に本上町にある小田切家のお宅をお借りしてゲストハウスをやって、今12年目になります。ご利用いただいているお客様からは日本らしい建物の中で生活体験ができると思って選んだといった声もいただいております。

また2021年には市が所有している国の登録有形文化財を民間で活用するという初めての事例だったわけですが、丸田医院さんのあったところを今一棟貸しの宿として運営させてもらっています。「100年後の須坂に伝え継ぐ」というコンセプトのもとにずっと明治から続く須坂の暮らしの豊かさをしらふじで見せていけたらと思っています。

重伝建のエリアで2店舗を営業している者としてこれからの期待ということなんですが、100年続く老舗のお店と、ここ十何年ぐらいで須坂らしい建物を活用した新しいお店が融合しているのがこの中心エリアの特徴でもあるかなと思うんです。今回重伝建に選ばれて、いろんな補助を受けられるようになるとこれからいろんな事業者の方が空き店舗や空き家を活用していく事例が増えていくと思うんです。これまではずごくいいペースで須坂に愛着のある方々がいろんなお店を開いてきて、すぐに辞めること

なく今も続いていると思うんですが、これでいろんな方が活用し始めるとなったときに、これからその空き店舗の活用とかは少しずつ私達も考えていかなきゃいけないフェーズになるのかなと思っていて、この重伝建エリアの中で営業する人や住む人は、今回重伝建になることである程度責任を持ったんじゃないかと思うんですね。

これからいろんな個性を出したお店を持ちたいとかいろんな希望をもった人が出てくるかもしれないんですけど、ここは須坂の重伝建のエリアなんだということで、その良さとかその価値をわかった人が活用していくことが重要だと思っています。なので、活用活用ってよく言われるんですが、空き店舗に誰でも彼でもお店が入ればいいとも思わないです。この重伝建のエリアでどんな営みが必要なのか、もっと須坂市を広く考えて、それは駅前でもいいんじゃないとか、インターの方にこれからイオンができて、それはインターの方であればいいんじゃないとか、ここだけのエリアで考えずにこの重伝建にあった営みが増えていったり、住んでいる人も住みやすくあり続けられればいいなと思います。

〔渡邊〕

重伝建選定いただくとやっぱり行政の覚悟が必要だよって言うのはずっと言ってきたことですし、それを確認しあってきたんですが、流石須坂の30年40年の苦労の中で、もう住民の方がこういう覚悟を持っていて、選定を迎えていくというその覚悟を聞いて大変感動いたしました。ありがとうございました。

それでは三木市長、お願いいたします。今回改めて須坂を重伝建制度で保存し、活用すると決断されたその思いは何だったのか、お伝えください。

〔三木〕

小林さんがおっしゃいましたように、先輩の皆さんが非常に熱心に活動されていたというお話をずっとお聞きしておりました。私も全国の町並みフェストに出まして、お庭拝見だとかそういうのを皆さんに快く受け入れていただいていたというふうに感じました。長い間そういう先輩の皆さんが大変な努力をされてきたということで本当にありがたいと思っています。

先ほどもご挨拶で申し上げましたけども、調査をしたところ伝統的建造物が2分の1になっているから大変だということで市の職員から「重伝建の選定に向かってやりませんか」という提案をいただきました。私は市の職員が自分で提案して自分たちの仕事が増えるわけでありますけども、それにチャレンジするということが素晴らしいと思いました。普通ですと仕事が増えることに対して嫌がる人もいますけれども、仕事というものはやりがいだということで考えますと、非常に職員の心意気が素晴らしいと思いました。

ちなみに文化スポーツ課の課長は以前担当でやっていたんですけど、そのまま課長になりました。私どもの市の場合には重要な仕事は変えないで本人の意思さえあれば、続けてやってもらうことが仕事の充実に繋がるというふうに思っておりますので、寺沢課長にも大変な仕事ですけど、やってもらいました。同じようにそれぞれの職員がこの仕事を引き継いでやってもらったということが大事だと思っておりますし、先ほど申し上げましたように所有者の方、地域住民の方の協力があってできたことだと思っております。

私は、製糸業というのは非常に須坂市にとって大事だという気持ちを持っておりました。それを一番教えていただいたのは小布施出身の市川健夫先生であります。市川健夫先生は「須坂は近代シルクロードの起点だ」ということを教

えていただきました。いわゆる近代のシルクロードがここから始まったのだということを市川先生に教えていただきました。また、信州学などの地域の学問を大切にするということを教えていただきました。そもそも全国で一律な学問ではなくて、地域には地域の大事な学問があるということを市川先生に教えていただきました。そして須坂には様々な資源がございます。そういうものを活かす1つとして伝統的建造物が非常に重要だと感じております。

今年答申を受けたというのも大変ありがたいと思っています。と申しますのは、1万円札の肖像に渋沢栄一翁が選ばれました。皆さんご承知の通り、旧須坂商業高校の創業の出資書の中には渋沢栄一翁が出ておりますので、そういう面でも今年の時期に選ばれたというのは大変ありがたいと思っております。

〔渡邊〕

いろんな職員からの具申があったり、あるいはそれを受けて今までの歴史研究の経過、それらを踏まえて時宜を得た場面として、重伝建選定の市長の想いをいただきました。

それでは続きまして、2つ目のテーマにうつらせていただきます。「重伝建制度によってまちづくりを行っていく中で、それぞれのお立場からこれだけはぜひやってほしいこと、あるいはこの制度として守ってほしいことはなにか」をテーマとさせていただきます。

また最初になり申し訳ございません、梅干野先生お願いします。やっぱり保存対策調査は実施する中で伝建に対する住民意識の醸成を行わなければならない貴重な場面でもあると思います。その意味からも調査された立場でやってほしいこと、そして約束として守ってほしいことをお伝えください。

〔梅干野〕

住民意識の醸成という点で言うと、先ほども調査の際に所有者の皆さんがとても建物に愛着を持たれていたという話をしましたが、実はもう既に意識を醸成されていたんだろうと思っています。これはこれまで30~40年かけてまちづくりに取り組んできたということの成果なんだと思います。今回調査を動かしたこのタイミングにたまたま重伝建になっていったというのが実際なのかなとは私は思っています。ですので、もう既に醸成されてきたので、非常に難しいんですけども。

ただ一方で、調査の中で所有者の皆さんとお話をしていた際に、たいていの皆さんが口にしていた心配事もございます。それは一言で言えば、人口減少時代という話です。人口減少で地方が衰退していったり、あるいはその家の維持であったり後継者問題っていうのが、やはりこの須坂の地でも当然ある。伝統的な建物をお持ちの方も、それは当然心配事として、どの家でも問題として抱えられているというのが実際かなと思います。これは須坂に限った話ではないと思いますけれどもやはりこの須坂の町並みが国の文化財として認められた以上、何とかしてこの町並みを次の時代へ伝えていかなきゃいけない。要するに人口減少時代を乗り越えていかなければならないということですね。

その点でやはり市民の皆さんと行政が一体となりながら、人口減少時代に負けない地方の活力をここから発信していかなければならないんだと思っています。私は重伝建制度を含む文化財にはそういった力があると思っておりますので、ぜひともお願いとして、市民の皆さんと行政と一体となりながらこれを乗り越えていていただきたいと思っております。

その際に大切なことは先ほどの山上さんのお話とも関わってくるんですけども常に須坂らしさとは何かというのを皆さんが意識をするこ

とだろうなと思っています。それと関わる須坂の町並みの価値と向き合うということがとにかく大事なことだと思っています。

皆さんどうでしょう。須坂の町並みの価値ってなんですか。先ほどのこれを見て須坂の町並みを構成している建物がとても多様ですよ。非常に価値を語るのは難しいんです。ちゃんと歴史も知っていなきゃいけない。かつそれと対応した建物の特徴も見えてこなきゃいけない。でも、ぜひともそれと向き合いながら須坂らしい未来を描いていてもらいたいなと思っています。

いずれにしても未来を構想する出発点としては、須坂の価値と向き合うというのをぜひやっていただきたい。この須坂の町並みの価値って唯一無二ですから。ちょっと極端な話になってしまいますけれども、今言ったことができれば本当に日本唯一のまちを目指すことができるし場合によっては日本一の町を目指すことができる。我々は今そのスタート地点に立つことができたということかなと思います。

〔渡邊〕

問題提起として、やはり少子高齢化の中で空き家問題は全国どこでも抱えている問題と思っておりますが、ある意味では中山間地域、伝建のあるなしに関わらず、地域の課題としては当然のようにある問題になります。

しかしながら重伝建という大きな勲章を持っている限り、それが例えば須坂市の他の中山間地域に比べても空き家率は下がってくるんですね。ぜひ空き家率を下げよう、行政の皆さんと住民の皆さんと両輪で頑張りたいと思います。

それでは土本先生、突然ですがお願いします。調査の実施、さらに伝建審議会の会長としてのお立場から、制度でやってほしいこと、あるいは制度として守ってほしいことをお答えく

ださい。

〔土本〕

制度としては特定物件には色々と助成できるということがあるので、海野宿とかだったら表の建物ばかりだったけれども、裏の小さな建物もきめ細かくやっていくというところをぜひともやってほしいと思っています。

その結果として、須坂が生活する場所として面白いと。山上さんが言われたとおり地区で暮らすというのは責任持って暮らすということなんだけど、逆によく魅力的な生活になることがあるので、その辺のところを調査中もやってほしいなと思っていました。

〔渡邊〕

重伝建制度は外部から見えるところだけじゃなくて、エリアとして選定する。まず地区を確定してから、それに対するそれぞれの建造物等を文化財として確定していくわけですが、そんな意味では今土本さんがおっしゃったように、須坂はかなり裏側まで踏み込んだ付属屋等にも支えられていまして、ある意味ではまたこれが大変魅力に繋がるかと思いますので土本先生のご提案をしっかりと活かしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

それでは小林さんお願いします。小林さんは伝建審議会において伝建制度による保存の制度設計にご尽力いただいたとのこと。地区の方々にやってほしいことと守ってほしいことを、審議委員のお立場ということで考えてお願いします。

〔小林〕

これから重伝建制度を活用して建物の修復が各地で実施されると思うんですけども、私の中でやってほしいというか、行えたらいいなと思っていることが、例えば町の中で1つの建物が

工事を行うときに、他の町の方々って、特に個人の建物が工事しているので、他人事というか、「工事始まったね」で終わってしまうと思うんですね。それだとやっぱり地域の重伝建制度を活用した事業じゃないので、例えば建物の修繕のプログラムの中で、素人とか子供たちでもできる作業がもしあれば、そういったところを参画させていただきたい。

また、先ほど梅干野先生がおっしゃっていましたが、そのプログラムの中でその建物の持ち主も建物に対して思いがありますので、自分なりの説明とか、思い出話とか、そういったものも話していただきたい。そうすることによってその方の個人の建物であるんだけど、地域の1つの建物みたいになって愛着が湧く。そういうことを続けていくことによって重伝建制度を活用して地域全体が町に愛着を持てる、そんな制度になっていけるのかなと思っています。そういったことをやりたいなと思っています。

〔渡邊〕

本当に核心をついたお話をいただきました。直しているときはそこに重伝建制度の種類が何々って看板みたいなものを立てますが、所有者・お施主さんが許す限り、見学会のように行政の担当と一緒に中まで見せてもらえるような場面になるとするならば、今度制度を使い修理・修景事業をする場合にこういうことをするんだという覚悟がそこで見ることができる。そのような場面で大変重要だと思いますので、ぜひ皆さん、そして行政の方も、そんな場面は作られた方がいいのかなと思って、大変いい意見でございました。ありがとうございます。

それでは山上さんお願いいたします。今まで山上さんは伝統的建造物の活用の実践をされてきています。この度重伝建に選定されることの中で重伝建制度を活用して行いたいことと、保

存として守らなければいけないことと相反する部分も多々あるのかなと思っております。その両立についてどのようにお考えいただいているんでしょうか？

〔山上〕

2021年に使わせていただくようになったしらふじを改修するときに、まさに保存と活用というところでかなり悩ましいことが多々ありました。ただ、今回重伝建に選定された中で、建物に価値があるということで認められていますけど、須坂に住む私たちは建物だけが残っても、しょうがないといえますか。私も建築は全くわからないので、観光に行くときもやっぱり建物が立派なだけじゃまだ足りないと思っていて、今回しらふじを活用していくときに、あの素晴らしい建物を使わせていただくこと自体にすごく価値があるんだと思うんですけど、やっぱりそれだけじゃなくて、その建物の中で丸田さんがどれだけ心豊かに生活してきたか、その建物の中でどうやって生活してきたか、ということがすごく表れていると思ったんですね。

なので、もちろん建物を守っていくというのは重要なんですけど、活用ということを考えたときには、ただ建物の保存と修繕だけを考えるんじゃないくて、その建物の中でこれまで須坂の人たちがずっと引き継いできた文化や伝統など、私たちは何を残していきたいのかを一緒に考えていく必要があるんじゃないかなと思います。私がしらふじを活用させていただく中で思ったのは、今ちょうど夏の時期なので建物にも衣替えがあって、襖が変わるとか、お客様が来る前に水打ちをすとか。あとゲストハウスとしらふじのお客様に「須坂って庭がすごく立派ですね」「どの家もすごく庭を綺麗に手入れされていますね」とよく言われます。しらふじで花器に生けてあるお花は庭からとったお花なんですけど、「自分のところの庭で花を摘んで、自

分の家の中で生ける、こんな豊かな暮らしはないね」と言われたことがあったんですね。

その建物を守っていただけじゃなくて気づいていないだけで、須坂はすごく豊かに生活をしていると思うんですね。食べ物も旬のものがたくさん出ていますし、当たり前のように食べているご飯、醤油、味噌、これは全部須坂産のもので生活していけると思うんですが、須坂の人たちがどれだけ須坂産のものを選んで食しているかっていうのも一緒に、建物だけじゃなくて生活の中身から考えていくこともこれから必要かなと思います。

〔渡邊〕

保存と活用が相反することが心配だな、なんて思っただけで投げかけたんですが、しっかりと視座が定められておりますので私の杞憂でありました。

それでは、三木市長お願いいたします。市長には別の方向からお尋ねいたします。重伝建選定により地区の内外、長野県内あるいは全国から須坂に対する見方が大きく変わると考えられます。そのことを踏まえて、重伝建地区を核にどのような施策をお考えでしょうか？お知らせください。

〔三木〕

山上さんの言ったことと全く同じなんですけど、重伝建の選定になったということで大きく変わることはないと思っています。

ある地域に行ったときに、素晴らしいところで、吉永小百合さんが大人の休日に出たところでもありますけれども、変わっておりませんでした。

一方、観光地的なところは重伝建になると変わります。私は地区内に住んでいる方が自信と誇りと愛着を持つこと、そして次の世代にも引き継いでいくことが大事だと思っています。

地区に住んでいる方に色々お話を伺いました。例えば、コロナの前ですけれども、まゆぐらに來た方にお茶と漬物を出したら山口からふぐをもってきてくれたそうであります。そしてその後は沖縄へその人が行ったときに花を送ってきてくれたそうであります。どこの地区へ行っても心に残るのは、その人とのお付き合いだと思います。

実は信州須坂観光協会のキャッチフレーズは仙仁温泉の金井社長が始めました「暮らし観光」です。須坂の暮らしをそのまま知っていただくというのは今山上さんがおっしゃったような観点だというふうに思っています。西村先生の本の中で文化や歴史、目に見えない資源という言葉があったかと思いますが、建物にプラスして目に見えない資源というのが大事なかなと思っています。そういう資源を大事にしていきたいと思っています。

また人口減少の問題がありましたが、実は須坂の場合には子育て世帯を中心として、転入してくるの方が転出する方より多いです。全体的に転入の方が多い地域であります。これは今年の日本経済新聞の全国版でも紹介されました。どうして転入の方が多いのか、市長として正直わかりません。でも転入してきた子育て世帯の人に聞きますと、待機児童がないとか、小学校で自然体験できるとか、子供たちがのびのび過ごせることとか、良いところをあげていただきました。

伝建地区についても、子供たちにもっと味わってもらいたいなと思っています。先ほど土本先生もおっしゃいましたように、高校生・中学生・小学生・保育園幼稚園の子供たちがもっと地区に行ったり、そのお宅へ行って、例えば旧小田切家でお昼寝をするとかそういうことをやってもらうことが子供心にすごく思い出になるんじゃないかなというふうに思っています。

〔渡邊〕

市長は重伝建に行政を引っ張って行って、議会の先生方に「経済効果はどれくらいあがったんだ」なんて責められると大変だなと思って質問させていただきましたが、今話していただいたように、本当に重伝建というのは数字に表れない効果というか、マインドの問題というか、そんなところがかなり大きなものを占めているなということを感じてやっておりました。今の三木市長のお考え、私は大賛成でありまして、これからもぜひ頑張っていただければと思います。

それでは梅津調査官、パネラーの皆さんそれぞれのお考えについて、文化庁のお立場から全国の重伝建地区を視野に、アドバイスをお願いします。

〔梅津〕

まず、土本先生のお話の中でもっと多くの建物や付属屋などにも目を向けてくださいというお話がありました。重伝建に選定するときに、この地区の特徴はなにかを一言で言うために種別を決めるんですね。例えば、港町、武家町、山村集落、宿場町など。須坂は建物の歴史も建築も非常にバラエティに富んでいるし、どうやって種別を一言で言ったらこの地区の特長を言えるんだろうって、結構審議会で議論になったんですね。普通は出したものはそうですかって感じなんですけど、ここは結論としましては「製糸町・商家町」にしたんですね。製糸町というのは製糸で栄えた町はわかりやすいんですが、商家町を使うのが非常に議論になったんです。なんでだろうって思うと思うんですけど、みんなまだ文化庁の中でも商家町というと城下町とか昔の近世の町で町割りされたところじゃないと商家町じゃないんじゃないかみたいなそういうプロトタイプの考え方があり、ここは近代の商業の町で、製糸で栄えた商家だからそれで商

家町って言葉を使うんですというのを、結論としてはみんな納得いただきましたが、結構種別を決めるのに時間がかかりました。製糸町は全国でこししかありません。桐生なんか近いのかなと皆さん思うかもしれませんが、あそこは工場ですので製織町という言葉を使っています。あとは京都府の与謝野町にあります近代からちりめん織物の製織町、それも近いですがそれもやっぱり織物の町で、商業として栄えたところの特徴がないので製織町として。そういう意味で奥の方に残っている水車小屋とか、女工さんの官舎とかそういうものに価値があるのかなというふうには思いましたので、この地区の特徴は何かって言われたときには、まず「製糸町・商家町」という唯一のオンリーワンの種別だと思っていただければいいなと思いました。

それから、山上さんの方から建物だけ立派では意味がないというお話がありました。私ども伝建部門として保存するのは文化財として伝統的建造物群だけれども、それを守るのはエリアですと言っています。つまりそのエリアの中に古い建物とか立派な建物以外の建物も地区の中でちゃんと保存して、いい方向に持っていかなきゃいけない制度ですし、民家園みたいに住まない町は面白みもないし、本来の趣旨ではないですね。外観だけしか規制しないって言うんですね。中は自由です。それは中に価値がないわけじゃなくて、皆さん生活していて、水回りまだ土間じゃなきゃいけないんですかって、大変ですので、価値がないわけじゃなくて、生活をしやすいために規制してないだけです。ただし、平面は必ず外観に出てくるので一度踏みとどまってこの家の中ってどういう特徴があったんだろう、だから掃き出しの窓になるのか、格子戸になるのかっていうのは考えていただけたらと思います。

それから小林さんの質問にお返ししたいので

すが、結構重要文化財の公開をして建物の説明をすることがあります。なかなか個人の家では難しいので重伝建では最後に報告をまとめることが多いんですが、当事者じゃない建築士の方々にも現場に入ってもらうことをお願いしています。そうすると設計をする人たちが色々なものを見て、学び、みんなで研究をすると、比較的保守的なものが出てくる。1人だけの建築士がいると結構奇抜なものが出てきて大変な思いをよくしているんですけど、やっぱりみんなで合意した建物は比較的調和のとれたものが出てくる。ぜひ須坂でも私どもが現地に行ったときに、建築士の方々が自分事としてついてきてくれると嬉しいなと思いました。

〔渡邊〕

それでは最後のテーマにうつらせていただきます。「重伝建選定によりまして10年後に須坂の町並みはどうなっているのか」あるいはどうなって欲しいかも含めてお願いしたいと思います。

まず山上さん、率直にあなたは10年後の須坂市をどうイメージされていますか。

〔山上〕

すごく難しいんですが、ただ50年後の日本は人口が半分になることが確定していく中で、須坂は今子育て世代が増えているという市長の話もありましたけど、ただ人口が減っていくのは絶対に時代の流れとして免れない中、一方で私普段外国の方の受け入れもしているんですが、外国の方も増えると思うんですね。そうなったときに私も言ったら本上町の生まれではなくて、もっと農村地帯の塩野の生まれなので、本上町の方々からしたらよそ者になるんですが、これからよそ者の人、国を超えたよそ者も含めてどんどん受け入れていかなきゃいけない時代にはなると思います。

そういう中でやっぱり大事になってくるのが須坂で大切にしていきたいもの、須坂で残していきたいものは何かっていうものを、ちゃんとそのよそ者に伝えていくこと、伝え継いでいけるかどうか大切だと思うんですね。

なのでこの重伝建に選定されたのも1つのきっかけで、このエリアの中の人だけではなくてやっぱり文化とかを伝えていくのは須坂に住んでいる人なので、エリア外の人も含めて意識を少しずつ変えていけるチャンスだと思うので、10年後さらには50年後に向けて、私も含めてなんですが、須坂の良さを見つめ直して須坂の守っていききたい暮らしは何なのかっていうのもっとみんなが考えて暮らすようになるそんな10年後だったら嬉しいなと思います。

〔渡邊〕

それこそ市長さんのお話にあったように、子供たちが学校の地域学習のテーマとして伝建地区を歩いて、旧小田切家で昼寝をしたりしながら、そんなようなことが当たり前のように、伝建なんて単語が当たり前にわかるような、そんな共通認識を持った地域であってほしいなと思っています。そう答えられるとやっぱり素晴らしいなと思っています。ありがとうございます。

小林さん、今までまちづくり活動を行ってきた経験から、重伝建になってからの活動とその先に見える10年後の須坂の姿をお伝えください。

〔小林〕

私どもの先輩方がこの町並みを保存していたいて残っていますので、10年後も変わらずに町並みが残っていればいいなっていうのが率直な気持ちなんですが、近年は歴史的建物の保存だけではなくて活用ということが大切で、先生の中には活用こそ保存という先生もいますけ

ども活用について考えていかなければいけないのかなということを思っています。

重伝建制度で建物を修復するんですけども、結局はお金が天から降ってくるわけではなくて、その修復費用も多くはやっぱり税金となりますのでやっぱり税金を使って建物を修復したんでしたら、活用して事業を行うなどして税金を納めていくということも大切なのかなというふうに思っています。

特に須坂市の場合を見ると、蔵の町通り、銀座通り、新町の通りの舗装を見ると他の道路とは違って、石畳み風の凝った造りになっていますが、やっぱり多額の税金が入っていますので、その沿線の方々はやっぱり住むこともいいんですけど、事業をやっていただければいいのかなっていうことをかなり期待しています。またそういったことで活用を促す政策をやっぱり市の姿勢にもお願いしたいなと思います。

人口はこれから減少していくと言われていんですけども、須坂市も立地適正化計画が発表されて、これから何十年ぐらいでこういう町になっていこうという長い計画が立てられていますので、そういったものも活用しながら、これからの須坂市のまちづくりというものを考えていかなければいけないのかなと思っています。

〔渡邊〕

やはり小林さん今までの活動の延長線上に、ただ保存だけではなくて、それが次の世代につながる、そんなような観点をお持ちだということがわかりました。

それでは梅干野先生お願いしたいと思います。先生は大学で歴史的な町並みを保存することを研究する学生を育てていらっしゃいます。現在でもいくつかの大学が須坂の町並みや建造物あるいは社会学的なテーマを持って集まっているとお聞きしております。さらに発展して、学生の集う町並みとして須坂にはどうあってほ

しいか。10年先を見据えてお答えください。

〔梅干野〕

先ほどからキーワードとして出てきておりますけれども、須坂市さんにはとても魅力的な学生参加の事業がございます。蔵の町並みキャンパス事業でございます。この事業は始まってから、かれこれ20年経とうとしております。今回我々がこの伝建調査に関わらせていただいたのも広い意味で言えば、この蔵の町並みキャンパス事業の一環ということで、調査の成果をお示しすることができたのも、蔵の町並みキャンパス事業が実ったものというふうな見方もできるかなと思っています。

私事で恐縮なんですけど、私の研究室も発足して今年でおそらく10年が経とうとしております。何となく10年スパンで色々ことが動いていっているなという実感があるんですけども。発足当初の1期生の学生が先ほど申し上げた蔵の町並みキャンパス事業と連携をしながら小田切家住宅の調査研究に取り組ませていただきました。彼は修士課程まで進学をしましたのでその修士研究も須坂で行わせていただきました。就職どうするのかと思ったら、須坂に定着をしまいまして、須坂市役所の職員として今この伝建担当をしております。目立たないんですが、後ろにポツンと立っている彼でして小西といいます。今回こういった形で重伝建の選定を受けることができたのも彼は本当に頑張った結果かなとも思っております。彼は須坂の町並みに魅せられて、ここに定着をして、そして須坂の町に育ててもらったというような過程がこれまであるかなと思っています。

まさにそういった過程をぜひとも継続をして若い学生をこの町並みの中で育てていくという取り組みをしていただけるととてもありがたいなと思っています。文化の護り人ともいうべき人材を育てていくフィールドが須坂にあって

くれるといいと思っております。

町並みというのは実際に文化財保護の現場です。そこに学生が関わるとんでもない経験で、学生たちの感性がそこで育まれていきます。まさに感性を大きく変えながらその10年後には須坂の町並みが文化の護り人を育む日本の中心地になってくれたらいいなんていうふうに思うわけです。

先ほどちょっと堅い話として須坂らしさと関係した須坂の価値に向き合うという話をいたしましたけれども、重伝建になるからこそ、これを出発点にして、改めてまた調査を動かして行って須坂の新しい価値を発見していくということが大事なかなと思っております。価値の追加や更新、根本は変わらないんだけど、ある種のその価値の新陳代謝といいますか、価値が新鮮さを保っていくことがとても大事だと思っておりますので、先ほど申し上げたような文化の護り人を育成していくような、その一例として、私も調査のお手伝いをさせながら学生たちとすすめていければいいかなと思っております。

〔渡邊〕

私もかなりの自治体の重伝建選定あるいは選定後に、ガイドラインや手引き書を作るお手伝いなんかもしています。

須坂の担当の課長さんも、課長補佐さんも担当さんも、フレキシブルな動きなんですね。

「これちょっとおかしくない。段取りがこういうふうになって動いてくるその流れがおかしい」あるいは「これは誰のためにつくるの」というようなことを投げかけたときに大体1日置いたら反応あるんですね。そんなようなところもやっぱり須坂は文化財に対してキャパの高い自治体だなと、私はそこくらいまでしか知りませんので、関わらせていただいてすごく驚いて、こういうような自治体だったらいいなと思いました。

以前、土本先生のところのお弟子さんが来ていただいて頑張ってくれたんですけど、結婚して東京行っちゃったもんですから残念ですが、今日もいっぱい信州大学の学生さんおいでかな必ず長野県下の伝建地区を持っている自治体の募集要望をしっかりと見て、もれなくそこにエントリーしていただいて、ぜひ底支えをしていたらいい、できればそこで就職して結婚して家庭を持っていただけると嬉しいななんて思っております。

それでは梅津さん、今後の伝建地区はどうなっているのか、期待を込めてお伝えください。

〔梅津〕

今日の話聞いて皆さんも感じたと思うんですけど、今までやってきたこととこれからやることでそんな大きな変化もなく通過点ではあると思うんです。ただ、一点だけ違うとなると今までは豪壮な建物を見に行っていたけれども、西村先生のお話にありましたが、今度はその間、点と点をつなぐ想像力が重要だということです。この想像力を作るといえるのは実は須坂では結構大変なことでそれについても結構事前に十分な議論をして、ただ動かしてみないとわからないというところで、時間がかかったところではあります。ですのでその点と点をつなぐ想像力を皆さんで作り上げている10年後は絶対良くなっているということを思います。

それから最後にメッセージですが、重伝建地区129地区になりますし、50年もやっているというところが出てきています。今保存も活用も考えなきゃ頑張んなきゃっておっしゃっていて、それに水を差すわけじゃないですが、もっと力が抜けていって楽しく町に住んでいること自体が活用ですので。保存して息子に頑張れって言っても多分息子たちは嫌になるんですね。みんなおじいちゃんが決めたことだからわ

しは知らんっていうのはよくあることで、ただ今見ているとお孫さん世代でいいなって戻ってくるということが多くて。

ですので、唯一言えることは楽しくやっていたらお孫さんたちがついてきます。とあるシンポジウムで言われたのですが、自分はお父さんたちに「大変だからおまえは町を出て行け」と言われたんですって。だけどそんなこと言っていたら自分の息子たちはもっと嫌になっちゃうから自分たちは楽しくやるんだとそういう言い方をしていました。

今の世代のお孫さんたちが3代前のものを見ているということは私が明治の頃見ているようなことで確かにノスタルジックでいいなと思うわけで、そのノスタルジックでいいなと思うものを楽しくやっていたらもちろん、今すぐは東京に出たり長野市内で仕事をしたいってなるかもしれないけども、将来的には何かきっかけがあれば、地域のこういう町づくりにも関わってくれるんじゃないかなと思いますので、楽しく10年先もこれからもやっていただけたらと思います。

〔渡邊〕

文化庁から肩の力を抜いて楽しんで保存しようよと投げかけられましたので、しっかり実践していただければありがたいなと思っております。

それでは最後になりますが、三木市長お願いいたします。今回市長は須坂の町並みを重伝建制度によって保存し、なおかつ活用するという方向に舵を切られました。

保存を基本として活用する中での重伝建地区須坂の10年先の展望をお知らせください。

〔三木〕

ちょうど文藝春秋の8月号にプリツカー賞を受賞されました山本理顕さんの投稿が出ており

ました。これがすごく参考になりまして「建築とは人の記憶を後世に残すこと、そして評価されたことが、建築を通じて人々が集い、新たなコミュニティを生み出すことに貢献している」ということで評価されたということでもあります。重伝建の選定答申を受けたというのはまさにこれになるのではないかなと思っております。そして西村先生、土本先生からご講演いただきまして、建物とか地域のあり方の哲学的なことを教えていただいたというふうに思っています。

先ほど Goolight の方と須坂新聞の方とお話をしたんですが、このシンポジウム自体は次の10年先20年先30年先に振り返ったときに、このときにこういう形で先生方やパネルディスカッションのパネラーの皆様、大勢の参加者のもとでやったということが記憶にいい意味で残るのではないかなと思っております。そういう面で講演をいただいた先生方やパネルディスカッションに参加いただいたパネラーの皆様に感謝申し上げます。

それから先ほどお話がありましたが、これだけ大きな建物を永続して残すことはかなり大変だと思います。そういう面では保存と活用そして今梅津さんがおっしゃいましたように楽しむこと、それから愛着を持つということをやっていくことが大事だと思っております。そのために広い意味の活用策っていうのは、先ほど話したように子供たちが親しんでいくことが大事だと思います。

最後に、イオンモール須坂ができます。ある他自治体の地域作りに熱心に取り組んでおられる方から私にメールが来ました。イオンモール須坂ができることによって須坂市の伝統的建造物群がある程度毀損されるのではないかという話がありました。私はそんなことはないという話をしました。イオンモール須坂とは全然別な場所であります。

そして大事なことは今まで営々としてこの地域の皆さんが建物等を守ってまいりました。イオンモール須坂ができたからといってなくなるものではありません。もしなくなるとしたらもう既になくなっております。そしてイオンモール須坂、今計画していることは、この歴史のある須坂の町の中と連携をしていくということでもあります。イオンモール須坂の中に須坂ブースというのができます。これは全国でも珍しいケースでありますけども、その中で例えば飲食店のテストケース等をして須坂の町の中に人に来てもらう、そういうことをイオンモール須坂の岡本ゼネラルマネージャーを考えております。イオンモール須坂とそしてこの須坂の伝統的建造物群保存地区とが連携する、そしてさらに新しくできるルートイン須坂もこの地域の活性化を考えております。私は様々な形で大勢の方と連携するのが非常に大事だというふうに思っています。

重ねてこのような機会を設けていただきましたことに対しまして感謝申し上げます。私からのコメントとさせていただきます。それから渡邊さんには非常に素晴らしい司会とアドバイスをいただきましてありがとうございました。梅津さんも本当にありがとうございました。

〔渡邊〕

お褒めいただいて申し訳ございません。本当に市長さんのそのようなお考えの中で、伝建が伝建として単体で社会の中であるということは決してなくて、全ていろんな形で繋がりがながら、逆に伝建がその活力を吸い上げながらその威力をますます発揮するという、そのことをきちんと施策の中でお考えいただいていると大変尊敬しております。ありがとうございました。

本日は3つのテーマにつきましてそれぞれのお立場からご意見をいただき、今後の重伝建須坂に有益なご示唆を頂戴したと思っております。

す。

ここで私ごときがパネルディスカッションのまとめということは大変失礼なことだと思いますので、私が考えている須坂の伝建について少し話をさせていただきたいと思っております。

私は金沢の街並みが好きで関心を持っております。金沢には東山ひがしに始まり、寺町台など4つの重伝建地区があり、それぞれに個性のある町並みですが、私の関心は、金沢における重伝建選定までの過程と須坂市のその過程がとても似ているところにあります。

金沢市は戦災を受けていませんでしたが、片町や香林坊などの近代化が昭和40年代の初めに行われております。戦災後も木造の歴史的建造物が多く残る町並みと近代化のあり方について、金沢市出身の建築家で東京工業大学の教授であります谷口吉郎先生の発案で、昭和42年に「金沢診断」と名づけられることになる「保存と都市再開発診断」が行われました。この診断の詳細につきましては、本日ご講演いただきました西村先生が監修されて、金沢市にあります金沢建築館での企画展が開催しております。8月24日には金沢市で先生がそのフォーラムでご登壇されて、お話を伺うことができますのでそちらの方にぜひ皆さん参加していただきたいと思っております。

私はこの金沢診断から金沢市東山ひがしが重伝建選定まで約35年かかっているということそしてその間一度選定を断念していること、そして須坂は初めの伝建調査を行った平成元年から今回の重伝建選定まで約30数年かかったということの類似に驚いているところであります。

当時、町並み保存に取り組んだ金沢市長の山出さんが著書に書かれている内容に大変感動して、今回須坂の皆さんにお伝えしたいと思えます。金沢出身の文部大臣永井道雄さんが、まちづくりに関して当時の山出市長におっしゃった

言葉です。「金沢は一周遅れのトップランナーであれ」という言葉をお伝えされたと記されております。金沢市東山ひがしの重伝建選定が平成13年と大変遅かったわけですが、現在では現村山市長が全国の伝建協の会長を務められ、金沢市はまさに全国の重伝建地区のトップランナーであります。

一方須坂も同様に30数年にわたる思いを繋いでこのような中でこうして重伝建としてスタートを切るということとなりました。ぜひその熱い思いをこれからの町並み保存さらにまちづくりに生かされることを同僚として楽しみにしております。

そして須坂は10年後には、周回遅れではなく、長野県の、いや全国のトップランナーの重伝建地区となることを期待しておりますし、十分にその価値や能力を持っていると確信しております。

これが私の須坂の皆さんに重伝建について思うことをお伝えしたいことでございます。

本日は大変不慣れな進行でパネリストの方々に思いをお伝えできたか甚だ不安ではありますが、ご参集の皆様にも少しでも思いを届けることができたとしたら幸いです。

以上をもちまして、パネルディスカッションを終了させていただきます。パネリストの皆様、ご参集の皆様、ご清聴ありがとうございました。

【謝辞】

〔須坂副市長 中澤 正直〕

西村先生、土本先生、渡邊コーディネーター様、そしてパネリストの皆様には素晴らしい基調講演とパネルディスカッションをしていただきまして感謝申し上げます。

西村先生にはお話の中でありましたように、昭和60年代に日本ナショナルトラストの委託で行われた須坂市の調査の調査団としても、何度かお越しいただいております。また、都市計画道路の変更をしてまで、クラシック美術館を残す提案をいただくなど、本日の須坂市の伝統的な建造物の保存のためにご尽力いただきました。本日の講演の中では、保存地区に点在する町家をつないでいくことなど、将来の方向性について示していただきました。大変ありがとうございました。

また土本先生には現地調査に基づきお話をいただきました。町並みキャンパス事業の他、私達の身近にある歴史的建造物の価値や良さについて改めて気づかせていただきました。ありがとうございました。

そしてコーディネーターの渡邊様にはパネリストの皆さんのご意見を十分に引き出していただき、素晴らしいディスカッションになりました。ありがとうございました。

また、パネリストの皆様方にはそれぞれのお立場から、須坂市の町並みに関わる活動など感じることをご意見いただきました。ありがとうございました。

須坂市は中心市街地に重伝建地区を選定するなど、伝統的建物群を活用した町並みの整備を進める一方で、市長からありましたように、須坂長野東インターチェンジ周辺ではインター開発を行っておりまして、ものづくりや流通関連企業その他、集客用地につきましては、ホテル

ルートイン、ヤマダ電機、ホームセンタームサシ、そして来年の秋には県内最大のイオンモールが開場となります。一方では新しい町が形成され、一方では歴史的建物の整備が進められるなど、新旧が共存する町になっているわけでございます。

また国の名勝に指定された米子大瀑布や、峰の原高原、五味池破風高原などの大自然を備えた素晴らしい都市であります。私はこのように恵まれた資源を持つところは全国でも稀なところだというふうに考えておりますが、いかがでしょうか。

そして、本日のシンポジウムでは町並みを保存していくために様々なヒントをいただきました。これからが須坂市のまちづくりの新たなスタートだと思っております。

当該の事業を実現するためにまずは市民の皆様が、自分たちの町に自信や誇りを持ち、そしてここに生まれて育ったことに喜びをもつことだと思っております。

そして町並みを保存していくためには、市民の皆様の協力をなくしては成り立たないことを改めて痛感させていただきました。本当に有意義なシンポジウムでございました。ありがとうございました。

結びに、本日ご登壇いただきました皆様のご多幸をお祈りするとともに、ご出席いただいたことに厚く感謝申し上げます。皆様方の益々のご健勝とご活躍をご祈念申し上げますとともに、今後も須坂市に対しまして、ご指導を賜りますよう改めて申し上げます、御礼のあいさつに代えさせていただきますと存じます。

本日は大勢の皆様にご出席をいただきまして本当にありがとうございました。